JVS APEX

アペックスグループ

Sustainability Report 2023

サスティナビリティレポート 2023

環境・社会報告書

事業内容

アペックスグループの主要な会社
および事業の系統図

カフェサーバー事業

株式会社アペックス

株式会社アペックス西日本

→P16

全国にある45,000台の“小さな喫茶店（カップ式自動販売機）”を通して「最高の一杯、最高のひととき」をお届けする取り組みの中で培われた安心を引き継ぎ、約60年のノウハウを結集し、「コーヒー豆」「マシン」「保守メンテナンス」という三位一体の「M-one café Coffee System」を運営しています。約5,500台のカフェサーバーがアペックスの安心のシステムのもと、お客様においしいコーヒーをお届けしています。

自動販売機整備事業

日本ベンダー整備株式会社

→P28

アペックスは、1966年、オペレーターとして初めて自動販売機の整備を開始。1976年、整備部門が独立して、日本ベンダー整備株式会社となりました。計画的な整備を行うことで、自動販売機の長寿命化、省資源化、廃棄物の削減に取り組みます。

ヘルスケア事業

株式会社アペックス

株式会社アペックス西日本

→P13～14

嚥下機能の低下した方々にとろみを、また、いつものお飲み物に食物繊維という第六の栄養素や乳酸菌等をプラス。アペックスが長年培ってきた“カップ式”ならではの自動販売機の機能を活かし、健康への配慮を自動で行う調理機シリーズの運営をしています。

自動販売機オペレーター事業

株式会社アペックス　株式会社アペックスPV

株式会社アペックス西日本　株式会社東北フーヅ

全国に87ヵ所の拠点を持ち、独立系専業オペレーターとして、カップ式自動販売機を45,000台、缶・ペットボトル・紙パック飲料自動販売機を20,000台、カフェサーバー・とろみサーバー等を8,500台、運営しています。従業員様用としてオフィスや工場で、施設のご利用者様用として駅や高速道路SA・PA、病院等で、生徒様や学生様用として学校で、さまざまな方々の憩いにお役立ていただいています。

フード事業

株式会社アペックス
（レストラン アピシウス）

1983年4月に有楽町・蚕糸会館にて創業して以来、アールヌーボー調のしつらえを維持する店内は、バーコーナー、ダイニング、個室をご用意しています。“真実の正統派フランス料理”をご提供するため、そして、お客様に無二の感動をお贈りするために、その味を磨き続けています。美術館のような名画に囲まれた空間の中で、旬の食材で調理した料理の数々を堪能しながら、ゆっくりとした上質なひとときをお過ごしください。

産業廃棄物処理事業

株式会社アペックス
（中部リサイクルセンター）

→P25～28

2004年に開設した自社リサイクル施設（中部リサイクルセンター）で、飲料自動販売機を通して排出される、中部地区における使用済みのすべての容器包装類（紙カップ、缶、ペットボトル、ビン、原料袋等）のリサイクルを責任を持って行っています。

※産業廃棄物収集運搬業、産業廃棄物処分業の許可を取得しています。

Contents

会社概要　事業内容 1

アペックスグループの歩み 3

経営理念｜環境方針 5

ごあいさつ 6

アペックスの価値創造 7

サスティナブル経営の考え方
アペックスのマテリアリティ 9

環境ビジョン<APEX Eco Challenge>とSDGs 11

ウェルネス

いつも自分らしく生き生きと過ごせる社会を作るために 13

サスティナビリティ

持続可能な責任ある調達のために 17

カーボンニュートラルな社会の実現のために 19

循環型社会の構築のために 25

環境負荷の低減

事業活動における環境負荷 29

環境マネジメント

継続的な改善を目指して 31

社会との関わり

地域コミュニケーション活動 33

表紙のことば

今年、アペックスでは4年ぶりにオリジナルカップのデザインを新しくしました。デザインは全6種類あり、生豆の調達から焙煎を経て、お客様のお手元に届き、飲み終えた紙カップを専用の回収ボックスに入れていただくまでの工程を表現し、それぞれに「最高の一杯、最高のひととき」のメッセージを込めています。登場するのは、アペックスが展開している健康商品、healthy&beautyシリーズから生まれたしっかり者の猫「ビビ」と、のんびり屋の犬「けんけん」です。ビビとけんけんの織りなすくすっと笑える世界観をお楽しみください。

会社概要（2023年3月31日現在）

社　名	株式会社アペックス
本　社	〒474-0053 愛知県大府市柊山町2丁目418番地
設　立	昭和38年（1963年）2月
資本金	5,000万円
売上高	342億円（令和4年度実績）
社員数	1,350名
営業拠点	87ヵ所（令和4年12月末現在）

売上高・社員数・営業拠点は株式会社アペックス西日本を含む。

大府本社

東京本社

編集にあたって

編集方針

アペックスではステークホルダーの皆様と良好なコミュニケーションを図るため、「サスティナビリティレポート」およびWebサイトにより、環境保全活動に関する方針、計画、活動、結果と地域社会との関わりについての活動を開示いたします。

報告対象範囲　株式会社アペックス

※グループ会社のうち、株式会社アペックス西日本、日本ベンダー整備株式会社、株式会社アペックスPVの取り組みについては一部含みますが、株式会社東北フーヅの取り組みは含みません。

※「アピシウス」（フレンチレストラン）における取り組みは含みません。

報告対象期間

実績:2022年度（2022年4月1日～2023年3月31日）

※一部、直近のデータを含みます。

発行日　2023年7月　　**次回発行日**　2024年7月

本報告書に関するご連絡先　株式会社アペックス 環境部

〒102-0074 東京都千代田区九段南2丁目3番14号 靖國九段南ビル6階

電話:03-3234-6501　　FAX:03-3234-3422

レポート内容は弊社ホームページでもご覧いただけます。

https://www.apex-co.co.jp

参考ガイドライン

「GRIサステナビリティ・レポーティング・ガイドライン第4版」「環境報告書ガイドライン2018年度版」に準拠しています。

COOL CHOICE　未来のために、いま選ぼう。　Water Project　地方創生SDGs 官民連携プラットフォーム　SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

アペックスグループの歩み

祝 60th

年度	アペックスグループ	国内外の動き
1961年	●自動販売機の研究に着手	●三重県で四大公害病のひとつ四日市ぜんそくが発生
1963年	●日本コカ・コーラ株式会社よりカップ部門の認定オペレーターの指定を受け、この運営のために日本自動販売株式会社を設立	●日本初のテレビアニメ「鉄腕アトム」が放送開始
1964年		●東京オリンピック開催
1966年	●自動販売機の整備を開始	
1971年	●業界初の氷入りコールド機「CVC-1」発表	
1973年	●自動販売機の整備工場開設 ●本社に原料工場を新築	●第1次オイルショック
1976年	●整備部がグループ会社 日本ベンダー整備株式会社として独立	
1981年	●カップ式自動販売機「APEX2400」発表（業界初・ホット&コールド機）	
1983年	●フレンチレストラン「アピシウス」オープン	
1984年	●カップ式自動販売機「APEX AX-1」発表（業界初・カップミキシングシステム搭載）	
1986年	●カップ式自動販売機「APEX5000 SUPER BREWER」発表（業界初・左右同時販売可能） ●日本自動販売株式会社より「株式会社アペックス」に社名変更	
1988年		
1989年		●昭和から平成へ改元
1993年		●「環境基本法」制定
1996年	●デポジット式紙カップ回収機「カップエコジット™」発表（業界初） ●環境部を設立	
1997年	●カップ式自動販売機「APEX 120RV」発表（業界初・映像情報装置搭載）	●国連気候変動京都会議（COP3）開催（「京都議定書」採択）
1998年	●カップ式自動販売機「APEX 120RC」発表（業界初・左右同時販売可能） ●「環境報告書」発行開始	
1999年	●JVRリサイクルセンター設立	
2000年	●使用済み紙カップのマテリアルリサイクル開始 ●非木材紙カップの使用開始 ●ISO14001認証取得（東京本社・開発部・横浜南SC・厚木SC）	
2001年	●グループ会社 日本ベンダー整備株式会社にてISO14001認証取得 ●レギュラーコーヒー「有機栽培生豆100%使用コロンビア」発売開始 ●カップ式自動販売機「APEX 120QV」発表（世界最速（当時）クイックベンダー）	
2002年	●全社（101サイト）にてISO14001認証取得 ●愛知県で移動式固形燃料化設備を導入ーサーマルリサイクルを開始ー	
2003年	●新リサイクルプラント建設企画	
2004年	●中部リサイクルセンター開設　操業開始	
2005年	●グループ会社 株式会社名古屋フーヅ（現 株式会社アペックスPV）にてISO14001認証取得 ●「ウェステック大賞2005」において事業活動部門賞受賞	
2006年	●カップ式自動販売機「APEX130RC(T)」発表（大型タッチパネル搭載） ●中部リサイクルセンター全ライン操業	
2007年	●中部リサイクルセンター　拡張工事 ●「資源循環技術・システム表彰」において会長賞受賞	
2008年	●「全国高等学校定時制通信教育六十周年記念式典」において文部科学大臣賞を受賞 ●カップ式自動販売機「APEX 50RB」発表	
2009年	●カップ式自動販売機「APEX 120QREC」発表（業界初・オートキャッパー機能） ●カップ式自動販売機のテクノロジーを搭載したカフェサーバー「CS-1」発表（業界初・ペーパードリップ&エスプレッソ機） ●中部エリアで、レギュラーコーヒー残渣のリサイクル（肥料化）を発表	
2009年	●「エム・ワン カフェ コーヒーシステム」展開 ●株式会社アペックス西日本設立	
2010年	●自動販売機の研究に着手	
2011年	●大府本社、改装工事が完了 ●近畿以西のベンディング事業を株式会社アペックス西日本へ吸収分割により承継 ●コカ・コーラウエスト株式会社との提携により近畿以西のカップ機の受託を開始 ●関西エリアでレギュラーコーヒー残渣のリサイクル（炭化）開始	
2012年	●被災地の避難所にて「復興支援自販機」で被災地を支援 ●フレンチレストラン「アピシウス」にてチャリティーカレーの開催を開始 ●宮城県多賀城市と「災害時における支援協力に関する協定書」を締結 ●関東エリアで、レギュラーコーヒー残渣のリサイクル（肥料化）開始	●国連持続可能な開発会議（リオ+20）開催
2013年	●株式会社アペックス、創立50周年 ●カップ式自動販売機「APEX 85QVR」発表（業界初・魔法瓶構造湯タンク搭載、CO_2冷媒使用） ●間伐材紙カップの使用開始 ●フレンチレストラン「アピシウス」、創立30周年 ●「サスティナビリティレポート」発行開始 ●「平成25年度間伐・間伐材利用コンクール（製品づくり部門）」において、「間伐推進中央協議会会長賞」を受賞 ●関東エリアで、レギュラーコーヒー残渣のリサイクル（熱回収）開始	●富士山が世界文化遺産に登録
2014年	●「自動販売木®」の展開開始	
2015年	●カフェサーバー「CSS-1」発表 ●スペシャルティーコーヒー（「The ORIGIN of Apex」シリーズ）の展開開始 ●間伐材紙カップが「ウッドデザイン賞2015」において、「ウッドデザイン賞」を受賞	●国連持続可能な開発サミット（「持続可能な開発目標（＝SDGs）」採択） ●国連気候変動パリ会議（COP21）開催（「パリ協定」採択）
2016年	●北海道のバイオマスエネルギー活用プロジェクトに寄付、年間10t-CO_2の排出削減事業を支援 ●EMSをISO14001：2015に移行	●「女性活躍推進法」が施行
2017年	●カップ式自動販売機「APEX 100RS」発表（シースルー機） ●伊勢志摩サミット開催時に使用された国際メディセンターをはじめとする4会場で、味の素AGF株式会社のレギュラーコーヒー（煎（せん））を当社の業務用コーヒーマシンCS-1、CSS-1で提供 ●日本ベンダー整備株式会社、創立40周年 ●温暖化対策に資するあらゆる「賢い選択」を促す国民運動「COOL CHOICE」に参加	
2018年	●生物多様性民間参画パートナーシップに参加 ●カフェサーバー「CS-2」発表 ●マザーツリー支援活動を開始	
2019年	●グループ会社株式会社名古屋フーヅ（現「株式会社アペックスPV」）、創立30周年 ●「第25回 横浜環境活動賞　企業の部　実践賞」受賞 ●「とろみ自動調理機」発表 ●とろみ自動調理サーバー「APEX 30SV」発表	●「働き方改革関連法」が施行 ●平成から令和へ改元
2020年	●とろみ小型自動調理機「APEX 55T」発表 ●健康サポート機能付きカップ式自動販売機「ヘルスチャージスタンド」発表（同時に機能性素材「難消化性デキストリン」入り飲料展開開始） ●国立研究開発法人 海洋研究開発機構（JAMSTEC）にアペックスが持つコーヒー抽出機のノウハウの提供開始	●「パリ協定」本格実施 ●新型コロナウイルス感染症（COVID-19）によるパンデミック ●日本政府が「温暖化ガス排出：2050年に実質ゼロ」を表明
2021年	●カップ式自動販売機「マザーツリーコーヒー」の展開開始 ●機能性素材「シールド乳酸菌®」入り飲料展開開始発表	●第32回オリンピック競技大会（2020／東京） ●東京2020パラリンピック競技大会
2022年	●株式会社名古屋フーヅより「株式会社アペックスPV」に社名変更 ●リユース容器対応マシン（CS-3）の本格展開開始（コーヒー豆&リーフティー対応機、イーチミル搭載）	●ロシア軍、ウクライナ侵攻 ●東京証券取引所、市場区分再編 ●沖縄復帰50年
2023年	●株式会社アペックス、創立60周年 ●フレンチレストラン「アピシウス」、創立40周年 ●コカ・コーラボトラーズジャパン株式会社との提携により東日本エリアの自動販売機の委受託開始 ●東京建物株式会社／サーモス株式会社／パナソニック株式会社／株式会社アペックス／味の素AGF株式会社の4社で、自動洗浄機を活用したマイボトルの利用促進に関する共同実証実験実施	

高度経済成長期 ／ 安定成長期からバブル期へ ／ 失われた10年（景気停滞期） ／ 環境の世紀へ

働き方改革の時代へ ／ 女性活躍の時代へ ／ 環境の世紀へ

経営理念｜環境方針

経営理念

常に改善・改革を繰り返し、最高の商品とサービスを提供する
正当な利益を創り、働く仲間の成長と社会への責任を果たす
環境保全活動に最善を尽くし、地球環境との調和を図る

アペックスグループ環境方針（1999年制定　2021年改訂）

基本理念

経営の最重要課題のひとつに「地球環境との調和」を掲げるアペックスグループは、環境経営を事業活動の基軸にしています。自然と共生した持続可能な脱炭素社会の実現を目指して環境保全活動に最善を尽くすとともに、事業を通じて環境課題に取り組み、社会に貢献します。

基本方針

1. アペックスグループは、自動販売機オペレーター業界の一員として、バリューチェーン全体を視野に入れ、事業活動のあらゆる側面において、環境負荷の低減ならびに汚染の予防に努めます。そして、革新的な取り組みをすることによって、環境に有益となるような循環を生み出すことを目標とします。
   (1) 環境パフォーマンスの向上を図るため、環境マネジメントシステムを機能させ、運用し、継続的に改善します。
   (2) 循環型社会の実現と省資源に向けて、原材料・エネルギーなどの4R※（リデュース、リユース、リサイクル、リカバー）を、適正且つ積極的に推進します。
   (3) 水や農産物等、生物多様性の恩恵を享受する企業として、その価値と重要性を意識し、保全に努めます。
2. アペックスグループは、環境側面に関係している適用可能な法律・条例による規制、協定および自主管理基準について、高いモラルで順守します。
3. アペックスグループは、地域に密接した環境保全活動を行うとともに、地域の皆様との関わりを大切にし、良好なコミュニケーションに努めます。

※4Rについて
アペックスでは、1996年に環境部を設部して以来、一般的な「3R」（「Reduce -発生物を抑制する、削減する-」「Reuse -再利用する-」「Recycle -再生する-」）に、「Recover -エネルギーで再利用する-」を加えた「4R」を推進しています。
4つめの「R（Recover）」とは、アペックスの取り組みの特長のひとつで、自動販売機から排出される可燃廃棄物をRPFという固形燃料にし、エネルギーとして再利用するという活動（詳細は、P25～28をご参照ください）です。

ごあいさつ

創業60周年を迎え、これからも“必要とされるカップ式自動販売機”であるべく邁進してまいります。

アペックスは、今年、創業60周年を迎えました。これもひとえにお客様、お取引先様をはじめとするすべてのステークホルダーの皆様のご愛顧の賜物と深謝いたします。

アペックスは創業以来、「カップ式自動販売機」を得意とし、カップ式自動販売機の機械・商品の開発、品質管理、環境活動に注力してまいりました。
お客様の嗜好、容器・容量、飲み物を飲む状況やオケージョン等の多様性が、「コーヒー」という飲み物ひとつをとっても、この60年間、とりわけ近年、多く見受けられるようになりました。それが、時に向かい風となり、時に追い風となりながら、歩幅は小さくとも確実な一歩一歩を歩んできたと考えております。

新型コロナウイルス感染症が引き起こしたパンデミックにより、アペックスも、例外ではなく大きな打撃を受けました。コロナ禍が、人の集うことを拒み、あらゆる“つながり”を分断させたことで、元来、人の集う場所に設置されている自動販売機のご利用も激減してしまうという事態となってしまいました。
長いトンネルだったコロナ禍にようやく出口が見え、人の生活様式や人の流れが再び大きく変わろうとしています。働き方改革もコロナ前とはまた違った局面を迎えているのではないでしょうか。ちょうどコロナ禍が働き方改革をある意味で“推進”し、リモートワークが急激に進みました。しかし、一定期間を経たいま、“リモートワーク疲れ”やリモートワークでの生産性への疑問が浮かび上がり、世界的に「オフィスという場の存在意義」が見直されてきています。リモートワークでは得ることのできないもののひとつに、オフィスでの“偶発性の会話”が挙げられます。そこから生まれるアイディアが仕事の重要なヒントとなりうるのです。そんな偶発性の会話の生まれる最適な場所が、コーヒーを片手に集うリフレッシュルームや自動販売機の前だといわれています。アフターコロナにおいて、アペックスのカップ式自動販売機は、多くの人々が集い、語り合う、“つながる”社会・未来を実現し、人々のマグネットとなり愛される「最高の一杯、最高のひととき」の提供を目指します。皆様の憩いの一杯であり、“オフィスに行くと飲める”魅力的な一杯であり、“偶発性の会話”のトリガーとなる一杯をご提供するマグネットとなることこそ、アペックスのパーパスであると考えます。

アペックスは、2年後の2025年末までに「カップ式自動販売機市場シェア8割獲得」を事業計画に定め、拡大均衡の道を採り、動き出しています。今後より一層、カップ式自動販売機だからこそご提供できる“最高の一杯、最高のひととき”を追求してまいります。

2030年をゴールとして設定しているSDGsは、2023年が折り返し点となります。日本ではSDGsの認知度は上がっているものの、コロナ危機、ウクライナ危機、気候危機という3つの危機により、SDGsの達成状況は足踏み状態が続いており、期限までの達成が危ぶまれています。非常に心苦しいことではありますが、アペックスでは、これまでの事業活動で培ってきた強みと自らの課題への取り組みにおいて、自分たちにできる最大限の力で「健康」「南北問題」「気候変動」等数多くのSDGs目標達成に貢献したいと考えております。
具体的には、ウェルネスに着目して取り組んでいる「とろみ自動調理機」や、ボタン1つでいつものコーヒーに難消化性デキストリン等を添加できる「ヘルスチャージスタンド」、そして廃棄物削減や温室効果ガス削減、海洋プラスチックごみ問題に着目したリユースカップ対応マシンの拡販に注力してまいります。
また、アペックスにとって生命線となるコーヒーが直面している「コーヒーの2050年問題*」に対しては、NPO法人マザーツリープロジェクトを引き続き全面支援することで、コーヒー発祥の地エチオピアとの共創につなげてまいります。この活動は、アペックスにとって、サスティナブルな生物資源と事業のために欠かせない活動であると考えております。コロナ禍とエチオピア内戦により、活動が停滞しておりましたが、今年度はモニタリングから着手し、先進国のお仕着せではない、相手側に立った支援をしていく所存です。

これからもアペックスは、60年間培ってきたアペックスマインドを引き継ぎ、お客様をはじめとするステークホルダーの皆様のさまざまなお声に耳を傾けながら、皆様と共有できる新たな価値を創造し続ける企業を目指して、成長を続けてまいります。今後とも、アペックスグループの事業活動にご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

2023年7月吉日

株式会社アペックス
代表取締役社長

※コーヒーの2050年問題
気候変動の影響でコーヒー豆（特にアラビカ種）の生産に適した土地が2050年頃までに現在の約50%まで減少するといわれている問題。コーヒーが農産物であることから、気候変動に因る湿度や雨量の変化がコーヒー収穫量の低下を招いたり、栽培の適地が減少したり、コーヒー生産者が減少したりすることが懸念されています。

アペックスの価値創造

価値創造プロセス

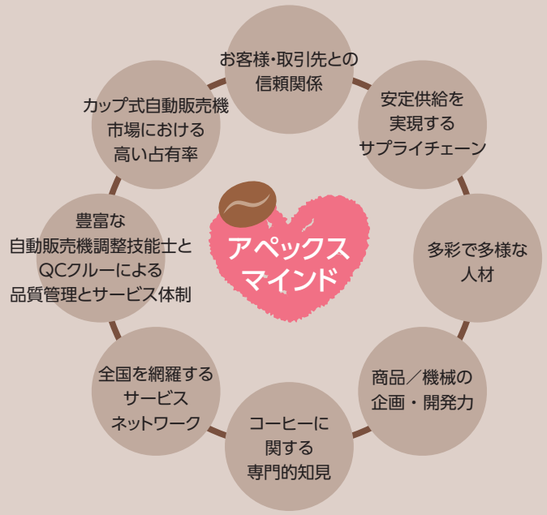
パンデミックで経験した、人と人とのつながりの大切さや、誰かとつながっていたいという思い。アペックスは、一杯のお飲み物が、人と人をつなげるマグネット効果を持っていると考えます。

アペックスは、変化し続ける社会課題や環境と向き合い、パーパス「人々のマグネットとなり愛される“最高の一杯、最高のひととき”の提供を目指すこと」を経営の根幹に据え、経営理念の実現に向け、環境ビジョン「APEX Eco Challenge2050」のもと、重要課題に取り組みます。その取り組みの中で、受け継ぐものは受け継ぎつつ、強みを活かし変革に挑むことで、社会価値と経済価値を創出していきます。

さらなる
“最高の一杯、最高のひととき”へ

INPUT

アペックスマインドを支える資本

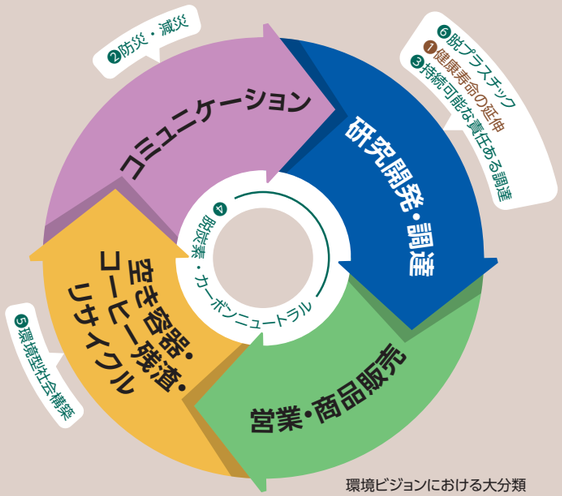


アペックスのパーパス

多くの人々が集い、語り合う、
“つながる”社会・未来を実現し、
人々のマグネットとなり愛される
「最高の一杯、最高のひととき」の提供を目指します。

事業活動

事業活動と6つのマテリアリティ



環境ビジョンにおける大分類
緑　字：サスティナビリティ
茶　字：ウェルネス

事業を支える基盤

- コーポレートガバナンス
- 人材育成
- コンプライアンス
- リスクマネジメント
- 環境経営

OUTPUT

**人と人をつなぐ
マグネット効果のある
“最高の一杯、
最高のひととき”の提供**

- 選りすぐりのコーヒー
- 高品質なお飲み物
- 健康を意識した機能性プラス飲料
- とろみ付きお飲み物
- リユース容器対応マシン
- 間伐材紙カップ
- 災害対応型カップ自販機

OUTCOME

社会価値と経済価値の創出

“カップ式”ならではの存在価値をすべてのステークホルダーに提供

カーボンニュートラル社会と循環型社会への貢献

共創を通じた自然の恵みと豊かさの継承

**持続的成長と新たな収益基盤の確立
ーカップ式自動販売機シェア8割獲得ー**

「アペックスグループの目指す姿」の実現

**経営理念
アペックス環境ビジョン**

社会の変化

- ■価値観の多様化
- ■嗜好の多様化
- ■ライフスタイル（暮らし方、働き方）の変化
- ■少子高齢化
- ■感染症リスク
- ■環境問題の顕在化
- ■エネルギー資源の高騰

サスティナブル経営の考え方

アペックスは、創業60周年の2023年を再び“創業の年”と位置付け、事業活動の意義や役割を見つめ直す中で、多くの社会課題に向き合いつつ、これまで培った強みを活かしながらアペックスならではの活動を強化していきます。そして、2025年末の「カップ式自動販売機市場8割」獲得を目指し、“必要とされる企業”としてステークホルダーの皆様からの信頼を集めるべく努めてまいります。

用語について

※1　自動販売機調整技能士
国家資格である技能検定制度の一種。都道府県職業能力開発協会（問題作成等は中央職業能力開発協会）が実施する、自動販売機調整に関する学科および実技試験に合格した者をいいます。アペックスでは、販売サービス部門に携わる社員の知識と技能の向上を図るためにこの国家資格の取得を奨励し、社内の技能評価の基準としても採用しています。また、毎年、社内で「スキルアップコンテスト」を開催し、自動販売機オペレートに関する知識と技能を受験者・スタッフともに高め合い、モチベーション向上にもつなげています。

等級	特級	1級	2級
人数	21人	232人	303人

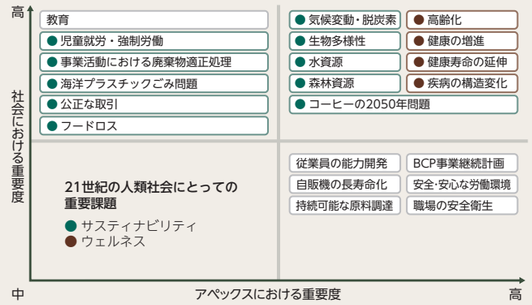
※2　サスティナブルコーヒー
サスティナビリティ（持続可能性）に配慮したコーヒーのこと。

※3　スペシャルティコーヒー
氏素性が明確で、際立った味や香りを持ち、しっかりした評価基準を満たす高品質なコーヒーのこと。

アペックスのマテリアリティ

企業を取り巻く環境には、気候変動や資源枯渇などの環境問題をはじめ、働き方改革の推進や長寿命化に伴う健康寿命の延伸、そして、バリューチェーン上の南北問題などの多岐にわたる社会課題があります。これらの課題のうち、アペックスが持続可能な事業活動を行うために重要な課題をマテリアリティとして定め、それらの取り組みを通じて、経営のリスクを回避し、イノベーション創出の機会を捉えていきます。

● アペックスとマテリアリティ



バリューチェーンのサスティナビリティ

	社会的課題	リスク	培ってきた強み	アペックスの取り組み
研究開発・調達	●気候変動対応 ●生物多様性 ●水資源 ●原材料ロス ●労働安全衛生 ●労働者の人権尊重	●気候変動による原材料調達不全 ●労働災害の発生 ●潜在的な人権リスク	●オリジナルシリーズ機を展開できる機械開発体制 ●飲み物の原料開発から商品化までを行う商品開発体制 ●コーヒーの原種の育種、品質向上への技術提供	●環境に配慮した原材料の調達 ●サスティナブルコーヒー※2の採用 ●コーヒー生産地の課題解決に向けた協働 ●間伐材認定紙カップの調達 ●ヘルスケア商材の開発 ●とろみ自動調理の研究
商品販売	●気候変動対応 ●公正な競争 ●フードロス ●お客様との関係を緊密化する健全なマーケティング（責任あるマーケティング） ●社会インフラとしての自動販売機 ●労働安全衛生 ●労働者の人権尊重	●独占禁止法、競争法、表示法等、販売に関する法的リスク ●労働災害の発生 ●潜在的な人権リスク	●全国に約600人いる自動販売機調整技能士※1とQCクルーによる品質管理とサービス体制 ●季節、お客様のニーズにお応えする商品提供 ●効率的なオペレート巡回	●独占禁止法や競争法、表示法等、販売に関する法規等の教育 ●HACCPに沿った衛生管理 ●QCクルーによる品質管理 ●とろみ自動調理器シリーズの展開 ●ヘルスチャージスタンドの展開 ●サスティナブルコーヒー、スペシャルティコーヒー※3の展開 ●ペットボトルのリサイクル繊維を使用した制服を採用
空き容器・コーヒー残渣リサイクル	●気候変動対応 ●廃棄物の適正管理 ●フードロス ●循環型社会構築	●廃棄物に関する法的リスク ●汚染 ●労働災害の発生 ●潜在的な人権リスク	●1997年から確立している紙カップのマテリアルリサイクルシステム ●廃棄物削減への取り組み ●自動販売機の長寿命化 ●空き容器の自社でのリサイクル（中部圏）	●紙カップリサイクル ●コーヒー残渣リサイクル ●廃棄物の適正管理に関する教育 ●廃棄物処理委託業者の現地確認 ●マニフェストの管理 ●リサイクル量の把握 ●自動販売機整備
コミュニケーション	●気候変動対応 ●商品の品質と安全性 ●廃棄物（リサイクル） ●フードロス ●情報の氾濫	●商品の健康被害（飲料事故） ●廃棄物やフードロス増大による環境負荷 ●リサイクルボックスへの異物混入	●定期的な情報発信、情報開示 ●NPO法人や行政との協働	●ホームページ「お問い合わせ窓口」への対応 ●Webサイトでの適切な情報共有 ●間伐材認証紙カップの使用 ●グリーン購入法に基づく自動販売機設置 ●出前授業の実施

環境ビジョン <APEX Eco Challenge>とSDGs

アペックスでは、環境ビジョン「APEX Eco Challenge2050」に取り組んでいます。ブランドの約束「最高の一杯、最高のひととき」に欠かせない数多くの取り組みに対し、目標を定め、取り組むべき課題をより具体化したもので、「ウェルネス(生活の質の向上)」と「サスティナビリティ(自然との共生・事業活動における負荷低減と地球持続性への貢献)」という大きな2つのテーマが柱となっています(右図をご参照ください)。今後ともこのフレームワークに基づいてサスティナビリティを推進し、社会課題の解決に貢献していきます。

アペックスでは、「APEX Eco Challenge2050」に基づく事業活動を通じて、SDGsが掲げる数々の課題解決に貢献できるものと考えます。

● アペックスの環境ビジョン

注) SDGsについて
「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals：SDGs)」は、2015年に達成期限を迎えた「ミレニアム開発目標 (MDGs)」に代わる2030年までの新たな国際目標として、2015年9月の「国連持続可能な開発サミット」で採択されたものです。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない (leave no one behind)」ことを誓っています。目標は、貧困や飢餓、エネルギー、気候変動、平和的社会など多岐にわたります。

「APEX Eco Challenge 2050」 とSDGs目標との関連

		活動のドメイン	社会課題(マテリアリティ)	貢献可能なSDGs	アペックスの取り組み	目標(KPI)	2022年度実績
ウェルネス	多様な場面における健康なこころとからだを支援する	健康	●生活の質(QOL)の向上 ●健康寿命の延伸	3 すべての人に健康と福祉を 17 パートナーシップで目標を達成しよう	健康に配慮した取り扱い商品の比率向上	2030年 ●取り扱い量：100t (のべ119万人相当)	●取り扱い量：114.2t (のべ144.9万人相当)
					とろみ自動調理機シリーズ／ヘルスチャージスタンドの展開	—	●累計設置台数:1,143台 (100RS設置台数は除く)
		防災	●被災者支援	3 11 13 17	「災害対応型カップ自販機」で被災者支援	—	—
サスティナビリティ	事業活動における負荷を低減し、地球の持続性に貢献する 自然環境と豊かさとの共生に貢献する	持続可能な調達	●人権・環境に配慮した原料調達	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 ※NPOとの協働により	サスティナブルコーヒーの定期購入	2030年 ●購入量：350t	●購入量：132.3t
		脱炭素／カーボンニュートラル	●温室効果ガス削減 ●特定フロンの全廃 ●森林吸収量の確保	6 7 12 13 14 15 17	1台当たりカップ式自動販売機のCO_2排出量削減	2030年 ●46.0%(2013年度比)	●削減率：44.7% ※自社商権における稼働機
					中部リサイクルセンターの使用電気の再エネ化	2021年4月 再生可能エネルギー化	●2021年4月 再生可能エネルギー化済み
					原料加工センターの使用電気の再エネ化	2030年までに再生可能エネルギー化	—
					間伐材紙カップの使用	使用率：100% ※ロケ先事情等特殊事情なロケ先を除く	●使用率：100% ※ロケ先事情等特殊事情なロケ先を除く
					自動販売機オペレート効率化	原単位改善(売上／給油量)2050年 ●10%(2021年度比)	●原単位改善率：6.2%
					指定フロン(R22)自動販売機の全廃		●稼働台数：0台 ※自社商権における実績
					地球温暖化係数の高いフロン使用自動販売機の順次切り替え	2050年までに全廃	●切替率：58.2% ※自社商権における稼働機
		循環型社会	●廃棄物削減 ●環境負荷低減	12 14 15 17	紙カップリサイクル	2050年 ●リサイクル率：90.0%	●リサイクル率：86.1%
					中部リサイクルセンターでの空き容器再資源化	2022年度計画 ●再資源化量	●資源化量： ●RPF処理量：197.5t ●資源化物処理量：901.9t
					自動販売機の長寿命化(自動販売機整) ※日本ベンダー整備株式会社	2022年度計画 ●整備台数	●整備台数：1,102台
					原料ロスの削減	2050年までに ●原料ロスゼロ 2030年までに ●キャニスターごとの廃棄量達成率：100%	●自販機別廃棄量目標達成率：74.8% ●キャニスター別廃棄量目標達成の勝率：33.9%
					コーヒー残渣リサイクル	●リサイクル率： ●[アペックス]2033年 80.2% ●[アペックス西日本]2037年 80.0%	●リサイクル率： ●[アペックス] 38.4% ●[アペックス西日本] 41.9%
		脱プラスチック 脱炭素	●プラスチック使用量削減 ●廃棄物削減	12 13 14 15 17	プラスチック包材からの変換	2050年までに ●変換率：50.0%	●変換率:57.5% ※購入量ベース
					リユース容器対応マシンの展開	—	●累計設置台数：192台

いつも自分らしく生き生きと過ごせる社会を作るために

ライフスタイルを取り巻く社会課題解決を目指して

( ) 内はターゲット番号

3 すべての人に健康と福祉を　17 パートナーシップで目標を達成しよう

(1.7.17)

生き生きとした毎日へのアプローチ
ーよりよいライフスタイルを目指すあなたをサポートー

いま、世界中でウェルネスが時代の上位価値として捉えられつつあります。また、コロナ禍を経験し、多くの人が「病気でない」というだけではなく、毎日をよりよく生きるための健康維持・増進に向けた生活を過ごしたいと望むところでもあります。そこで、アペックスは、これまで培ってきたカップ式自動販売機のノウハウを“ウェルネス”という側面からアプローチし、提案します。

とろみ自動調理機シリーズ

● ボタン1つで、いつものお飲み物に“とろみ”をプラス

高齢化先進国といわれる日本において、高齢化は社会のさまざまな側面に多大な影響を及ぼし始めていますが、深刻な課題のひとつが、高齢者の嚥下障がい[※1]への対応です。アペックスは、そんな動向に着目し、嚥下機能の低下した方にも飲み込みやすいとろみ付き飲料[※2]を提供するとろみ自動調理機シリーズの病院等への導入促進を進めています。とろみを必要とする方々にはもちろん、医療・介護現場で働く方々からも高い評価をいただいているほか、多くの方の目に触れる機会が増えるにつれ、テレビや新聞、SNS等でも大変話題となり、多くのお問い合わせをいただいています。

※本製品の開発では、協力会社であるニュートリー株式会社が嚥下補助食品の開発で培ったノウハウを活用し、カップ式自動販売機から抽出される飲料にとろみをつけるための技術協力と、とろみ材の提供を行い、アペックスはとろみ自動調理機シリーズの開発および導入後の品質管理、衛生管理などのトータルサポートを行っています。

● とろみ自動調理機（自販機タイプ）の主な特徴

①「とろみあり・なし」を選択できます。

②「とろみの濃さ」を調節できます。

利用者に応じて、「薄いとろみ」「中間のとろみ」「濃いとろみ」の3段階から選べます（とろみ調節ボタンを押さない場合は「中間のとろみ」が提供されます）。※

※日本摂食嚥下リハビリテーション学会 嚥下調整食分類2013（とろみ）参照

自販機タイプ

ロビーや談話室でお好みの飲料を！

外形寸法：W990mm×D780mm×H1,830mm

給茶機タイプ

省スペースで一杯ずつ調理が可能！

外形寸法：W550mm×D605mm×H1,700mm

医療・介護現場の慢性的な人手不足に一役買います。

サーバータイプ

ボタン1つで大容量の調理が可能！

外形寸法：W300mm×D650mm×H726mm（脚の高さ含まず）

用語について

※1　嚥下
飲食物を認識して口に取り込むことに始まり、胃に至るまでの一連の過程を指します。「嚥下障害」とは、飲食物の飲み込みが難しくなることです。

※2　とろみ付き飲料
飲飲み込みが難しい方の誤嚥・窒息を予防する目的で、医療機関や介護保険施設をはじめ、サービス付き高齢者住宅や有料老人ホーム等で提供されています。通常は、専用のテクスチャー改良材「とろみ材」を飲料に加え、スプーン等で撹拌し、とろみの程度を調整して作ります。

※3　水溶性食物繊維（難消化性デキストリン）
人の酵素で消化されない、難消化性のでんぷん分解物。でんぷんを化学的、酵素的に低分子化した炭水化物の総称であるデキストリンから難消化性成分を抽出した水溶性食物繊維。

※4　シールド乳酸菌®
乳酸菌とは糖類を利用して、乳酸をはじめとする酸を作り出す細菌の総称。シールド乳酸菌®は、健康力をサポートする乳酸菌で、森永乳業株式会社が保有する数千株の中から発見されました。ヒト由来のLactobacillus paracaseiです。殺菌菌体なので、どんな食品にも添加でき、アレルギーフリー設計の素材です。

ヘルスチャージスタンド

● ボタン1つで、いつものお飲み物に“機能性”をプラス

従業員様等の健康管理を経営的な視点で考え、戦略的に実践する「健康経営」。企業理念に基づき、従業員様等への健康投資を行うことは、従業員様の活力向上や生産性の向上等の組織の活性化をもたらし、結果的に業績向上や株価向上につながると期待されることから、近年、健康経営を経営の重要な柱のひとつと捉える企業が増えています。

アペックスでは、働く人の健康をサポートし、そんな健康経営の一助としてお役立ていただけるように、ボタンを押すだけで、いつものお飲み物に機能性素材をプラスすることができる新ジャンルマシン「ヘルスチャージスタンド」のご用意をしております。機能性素材シリーズには、いま人気の「難消化性デキストリン（水溶性食物繊維）[※3]」「シールド乳酸菌®[※4]」があり、お飲み物本来の味や香りを損ねることなく、手間をかけずに長続きする健康管理に貢献します。

自販機タイプ

外形寸法：W990mm×D780mm×H1,830mm

給茶機タイプ

外形寸法：W550mm×D605mm×H1,700mm

※スペースやご利用人数等に応じて、サイズの異なる2種類のヘルスチャージスタンドをご用意しています。

TOPIC・1　＃嚥下　＃とろみ　＃働き方改革

東川口病院に「とろみ自動調理サーバー」が導入されています。

ヘルスケアフードの明日を考える日清医療食品株式会社様が発行されている情報誌『きよら』で、アペックスの「とろみ自動調理機」「とろみ自動調理サーバー」を導入していただいている東川口病院が紹介されています。東川口病院は、設立以来、田辺院長の“三方よし”の考え方が根幹にある「皆さんに愛し愛される病院」という理念を掲げておられます。

アペックスの「とろみ自動調理サーバー」の導入にあたっては、「手作業でとろみをつけることを当たり前のようにやってこられた現場の方からは、本当に必要なのかという声もあったそうですが、実際に導入されると、とろみの濃度も一定につくれ、大量につくっても時間がかからないという点において、患者さまとしても満足度が高くなり、なにより職員さまの負担や不安がかなり軽減されました。（中略）医療は最終的には人の手による部分が重要ですが、機械がまかなえる部分は任せることによって生まれるゆとり。それが、患者さま、職員さま、組織の“三方よし”につながっていく（『きよら』より）」とのこと。アペックスのお手伝いできることはほんのわずかなことですが、そのわずかなゆとりで少しでも医療の質を上げるお手伝いにつなげることができればと考えています。

医療法人社団協友会 東川口病院
田辺院長

TOPIC・2　＃健康経営　＃認証

横浜支店の健康経営が認証されました。

横浜支店が、継続して　「横浜健康経営認証クラスA」の認証事業所となりました（認証期間:令和5年4月1日～令和7年3月31日）。

横浜支店の認証状

いつも自分らしく生き生きと過ごせる社会を作るために
ライフスタイルを取り巻く社会課題解決を目指して

（ ）内はターゲット番号

3 すべての人に健康と福祉を　11 住み続けられるまちづくりを　13 気候変動に具体的な対策を (13.1)　17 パートナーシップで目標を達成しよう (17.17)

TOPIC・3　#災害時・非常時支援　#減災

災害時・非常時に“ライフライン”となって活躍するカップ式自動販売機

アペックスでは、東日本大震災の復興支援での経験を活かし、自然災害や都市災害及び緊急事態等、不測の事態に十分とは言い切れない自助・公助を補完する共助のひとつの術として、「災害対応型カップ自販機※1」を提案しており、地方自治体様や病院様、企業様等との「災害時における支援協力に関する協定書」締結を進めています。とろみ自動調理機シリーズ（P13参照）がラインナップに新たに加わったことにより、災害時要配慮者にもお使いいただきやすくなりました。もちろん、平常時には普段通りのカップ式自動販売機としてご使用いただけます。

▶ これまでの支援事例

2014年2月	山梨県上野原市（上野原市役所）（豪雪）
2014年8月	徳島県那賀郡那賀町（那賀町役場）（豪雨）
2014年8月	広島県広島市北部 （広島市立梅林小学校・広島市立八木小学校） （土砂災害）
2015年8月	茨城県つくばみらい市 （つくばみらい市総合運動公園体育館） （鬼怒川堤防決壊）
2016年4月	熊本県阿蘇市・熊本市 （阿蘇医療センター・熊本市西区役所花園総合出張所） （大地震）
2018年7月	広島県呉市（呉市天応市民センター）（豪雨） 愛媛県大洲市（大洲市役所・喜多医師会大洲病院） （豪雨）
2018年9月	北海道胆振東部 （厚真町総合ケアセンター・厚真町厚南会館） （大地震）
2019年9月	千葉県八街市（台風）

「災害対応型カップ自販機」の特長

①安心の絶対数量（缶・ペットボトル自動販売機の最大収容数が500～600本に対し、紙カップは1,200個）

被災者お一人おひとりに行き渡ります。また、復旧に努める職員の方にもご利用いただけます。

②「お湯・お水」の供給

粉ミルクの調乳、薬の服用、アルファ化米※2等の非常食用に便利です。

③長期支援が可能

④紙カップの利便性

紙カップは飲料容器としてのみならず、食品容器としても利用でき、しかも衛生的。紙ならではの変形も自在なため、乳児にミルクを飲ませるための飲み口としても応用が利きます。

⑤使用後の処理の容易さ

重ねることや潰すことで減容化が図れ、可燃物として処理も容易。また、寒い時期には燃やして暖をとることもできます。

「災害対応型カップ自販機」

用語について

※1　「災害対応型カップ自販機」
一定期間飲料を無料でご提供（設置条件によって内容の異なる場合があります）するカップ式自動販売機。
- エマージェンシースイッチ（特許第6099097号）の切り替えもしくはキースイッチで、お飲み物が無料提供になります。
- 災害発生時、電気・水道が確保できれば、24時間いつでも飲料の提供が可能です。
- 一部の商品ボタンが、「お湯・お水」ボタンに早変わりします。

※飲料（湯・水も含む）のご提供にはライフラインの確保が必要となります。
※災害協定を締結して設置していただいていることが条件になります。

※2　アルファ化米
加水加熱によって米の澱粉をアルファ化（糊化）させたのち、乾燥処理によってその糊化の状態を固定、乾燥させた米飯のこと。

アルファ化米

TOPIC・4　#魅せるコーヒーマシン

エム-ワン カフェ コーヒーシステム

M-one caféは「最高の商品を提供したい」というアペックスの創業者森一（Mori Hajime）の想いを受け継ぎ、名前の一部を引用したブランドです。

「最高の一杯、最高のひととき」を追求する中で、本当においしいコーヒーをお届けするには、質のよいコーヒー豆とそのコーヒー豆のおいしさを最大限に引き出すコーヒーマシンとのマッチングが大切であるという考えに基づいた「M-one café Coffee System（エム-ワンカフェ コーヒーシステム）」は、コーヒー豆とコーヒーマシン、そして、メンテナンス技術サポートまでをトータルで提供するものです。

全国約45,000台の“小さなカフェ（カップ式自動販売機）”で、60年培ったコーヒー豆の味と香りを引き立てる術を知る、アペックスならではのドリンクシステムです。

● M-one café Coffee System が考える「おいしいコーヒー」のための３要素

CSS-2J

スリムなコンパクトボディで、本格コーヒーをもっと身近に。

味を損なわずにクイック抽出を実現します。

CS-2

魅せるスケルトンのコーヒーマシンで一杯ずつ「淹れたて」を演出。

ペーパードリップとエスプレッソをお楽しみいただけます。

CS-3

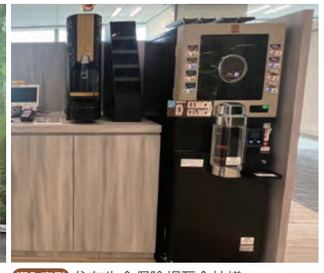
ボトルやタンブラー等のリユース容器対応マシン。専門店と遜色ないコーヒーとリーフティーがお楽しみいただけます。

＊詳細はP23をご参照ください。

導入事例 ENEOSジェイクエスト綾部店様

導入事例 ポルシェスタジオ銀座様

導入事例 株式会社 福井村田製作所様


導入事例 住友生命保険相互会社様

持続可能な責任ある調達のために
コーヒーを取り巻く社会課題解決を目指して

※NPO法人マザーツリープロジェクトとの協働による。

コーヒーの持続可能性にアプローチ
―コーヒーでつながる、すべてのひとのために―

世界で最も飲まれている飲み物のひとつであるコーヒー。その一杯には、ロシアのウクライナ侵攻の影響、新型コロナウイルス禍による供給網の混乱等の世界情勢や、生産者の労働環境、人権、貧困等、根深い社会課題が凝縮されています。また、近い将来には気候変動の影響により、コーヒー豆の生産が地域によっては激減する(コーヒーの2050年問題)との警鐘も鳴らされている、危機に瀕した農産物でもあります。
アペックスは、“おいしいコーヒーが飲める幸せ”を持続可能にするため、また、責任ある調達のため、エチオピアのコーヒー生産地支援を行っています。

「マザーツリー（母なる木）」が持続可能であるために

アペックスは、コーヒーノキ(コーヒーの木)の栽培指導や栽培されたコーヒーの定期的な購入、そして販売を通じ、次のような生産者への還元を行っています。

❶コーヒーの品質向上のための栽培技術指導を行ってグレードを高め、そのグレード相当の適正価格で定期的に購入します。
マンキラ村に古くから「マザーツリー(母なる木)」と呼ばれ、神木として崇められているコーヒーノキがあります。マザーツリーおよび周辺の自生するコーヒーの木々は高いポテンシャルを持ちながらも、生産者たちに知識や技術がないために、収穫した多くは地域での消費で終わっていました。そこで、アペックスは、NPO法人マザーツリープロジェクト※1とともに、彼らに教育と指導をすることで、それらの木々の持っているポテンシャルを最大限引き出し、輸出できるレベルまでグレードを引き上げ、その価値に見合う価格で定期購入をすることで、生産者たちを支援しています。

マザーツリー

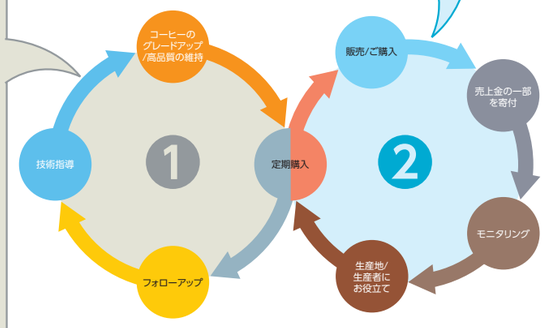
カファ地方

＊コーヒーは、森林の日陰を利用して栽培ができる数少ない樹種のひとつです。森林を守りながら、コーヒー生産を営む技術を支援すれば、現地の人々の生計の向上と地域の環境保全に貢献できます。

❷「マザーツリーブレンド」をご愛飲いただいた売上金の一部をNPO法人マザーツリープロジェクトを通じ、現地のパートナーと協力して生産地の抱える課題のモニタリングを行うことに活用する予定です。

NPO法人マザーツリープロジェクトのロゴマーク。アペックスの「マザーツリーブレンド」のパッケージにもこのロゴマークがデザインされています。

「マザーツリーブレンド」パッケージ



支援状況の進捗とNPO法人マザーツリープロジェクトの活動について

年度末（3月）までの活動・支援状況について、4月以降に報告することをルールに運用しています。長引くコロナ禍と現地の戦禍により、なかなか思うような取り組みができておりませんでしたが、2022年3月末の停戦により渡航危険レベルが引き下げられたのを受け、NPO法人マザーツリープロジェクトが現地に赴きました。4月8日には、在エチオピア日本大使館を訪問し、マザーツリーコーヒー事業のビジョンや支援活動について、伊藤大使と対談しました。先進国の押し付けではなく、“真に貢献できる活動”を追求することこそが、マザーツリープロジェクトのビジョンです。滞在期間中に、マンキラ村を訪れたほか、現地NGO団体Center for Accelerated Women's Economic Empowerment (CAWEE)(呼称：カウイー)が支援する、ハチミツ農園を訪問し、代表のDehab(ダハブ)氏とも交流しました。

現地のNGO団体 CAWEEを訪問

帰国後、7月には駐日エチオピア大使館を訪問しました。これまでのマザーツリープロジェクトとしての活動報告や、今後の日本とエチオピア間の文化や産業の認知拡大に向けて相互にサポートしていくビジョンを掲げ、着任したばかりのテフェラ大使と対談しました。

また、11月には、アペックスも同行し、現地でのコーヒー豆の精製に関し、指導を行いました。ただ、今回の滞在期間中には、支援のためのモニタリング(現地大学の支援要請を予定。相当数の人数や期間を要する)実施まではできませんでした。

在エチオピア日本国大使館にて

TOPIC・1　#資格

アペックスのQグレーダー※2・ブラジルコーヒー鑑定士※3

アペックスには、コーヒー豆の買い付けや販売、輸出、相場感覚などの商業上の知識や、コーヒー豆の格付けをするための知識、ブレンド製造の技術を習得した「Qグレーダー(Licensed Q Grader)」と「ブラジルコーヒー鑑定士」の資格を持つ技能者がおり、コーヒーの品質に責任を持っています。

ブラジルコーヒー鑑定士の身分証明書

Qグレーダー・ブラジルコーヒー鑑定士
石原室長（開発室）
「支援しているマンキラビレッジのコーヒーノキのポテンシャルをもっと高めたい」

TOPIC・2　#教育

コーヒーインストラクターの育成

アペックスでは、コーヒーのプロとして、コーヒーのより専門的な商品知識を身に付けることにより、お客様との円滑なコミュニケーションを図ることを目的に、全日本コーヒー商工組合連合会が認定しているコーヒーインストラクターの育成を奨励しています。現在、アペックスには、全国で413名のコーヒーインストラクターがいます。

社内のコーヒー勉強会

用語について

※1　特定非営利活動法人(NPO法人)マザーツリープロジェクト
世界の労働者に対する市民意識の推進に寄与することを目的に設立されたNPO法人で、国際協力の活動、環境の保全や経済活動の活性化を図る活動を主としています。具体的には次のようなことに取り組んでいます。
- エチオピアなどコーヒー原産地国の労働者に対して、労働環境改善のための事業と状況分析のための調査研究を実施し、現地労働者の生活状況の向上に寄与しています。
- 広く一般市民に対して、コーヒー生産地における労働者の状況や改善に関心を持ってもらうための事業を実施しています。

※2　Qグレーダー(Licensed Q Grader)
SCAA(米国スペシャルティコーヒー協会)が定めた基準・手順に則ってコーヒーの評価ができるとCQI(場合によってはCQIとSCAAの両方)が認定した技能者のこと。現在世界で約6,000人、日本では約180人が取得している資格です。これは、世界のコーヒー従事者のわずか0.016%です。

※3　ブラジルコーヒー鑑定士(Classificador)
正式には、「ブラジルサントス商工会認定コーヒー鑑定士」。ブラジルのサントス商工会議所が認定する資格制度によって認定された技能者のこと。生豆の粒の大きさ、均質性、欠点豆の混入率といった見た目の品質判定や、カップテスト(試飲)による風味の判定、取引での商品の価値決定などに大きな役割と権限を持っています。

カーボンニュートラルな社会の実現のために

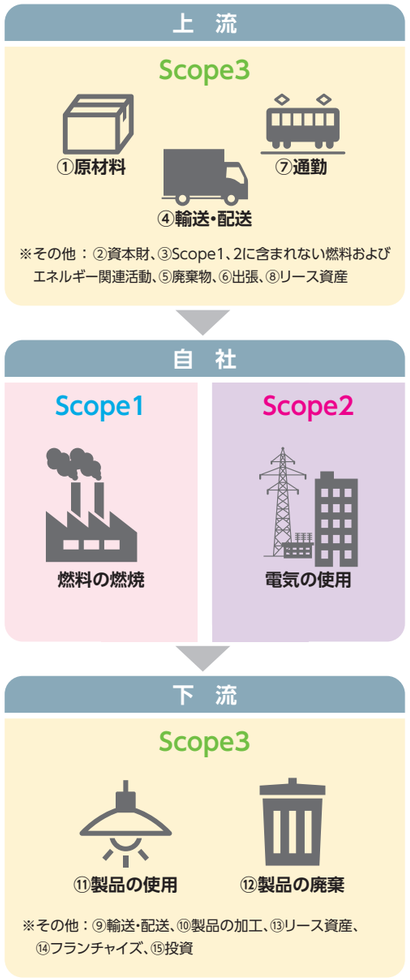
温室効果ガス排出量削減を目指して

温室効果ガス排出量削減への取り組み－地球の一員の責務として－

アペックスは、コーヒー豆をはじめとする農産物、森林の賜物である水や紙カップ等、自然の恩恵を受けた企業として、環境保全に対する社会的責任があると考えています。温室効果ガス排出量削減や、気候関連財務情報タスクフォース（TCFD）シナリオ分析による気候変動対策に取り組んでいます。

温室効果ガス排出量削減

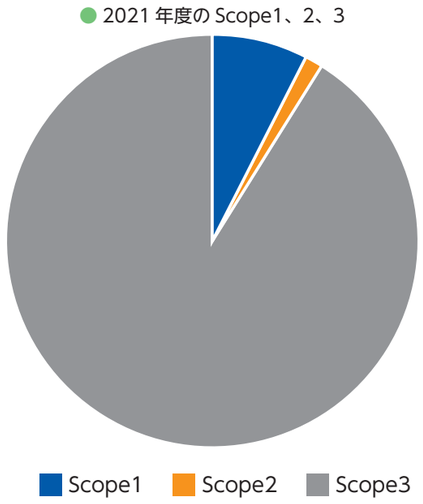
アペックスは、気候変動緩和策として温室効果ガス（GHG）排出量削減に取り組み、2030年までには、Scope1、2で2018年度比46.0%削減、2050年度までには実質ゼロを目標に掲げています。



一方、2022年度から、コカ・コーラボトラーズジャパン株式会社様との協働により東日本エリアを中心としたカップ式自動販売機受託が本格化しました。それに加え、2023年度からはサントリービバレッジソリューション株式会社様との協働によるカップ式自動販売機の受託が始まりました。これにより、カップ式自動販売機の所有台数が増え、拡大路線に転じており、オペレートに必要な車両台数も増えることから、Scope1、2が増えることが見込まれます。

この状況を踏まえつつ、削減目標実現のために、アペックスでは、事業計画を新たにし、「カップ式自動販売機のあり方」「オペレートのあり方」「車両のあり方」から見つめ直します。「カップ式自動販売機オペレーター業」に主軸を置くことで、「取り扱い商品」「オペレートのあり方（車両のあり方）」がおのずから変わることから、Scope1、2のみならず、Scope3削減にもつなげることができると考えています。

●温室効果ガス排出量（2021年度）



●気候関連財務情報開示タスクフォース（TCFD）提言に沿った気候変動リスク・機会について

	リスク項目	事業への影響	リスク対応策	機会
移行リスク	政策と法・炭素価格の上昇	炭素税導入により工場の操業や原材料などのコストが増加する。 低炭素な車両の導入や自動販売機の開発などのコストが増加する。	再生可能エネルギーの使用、ハイブリッド自動車や電気自動車等の低炭素車両へのシフト、自販機オペレートの巡回効率向上、低炭素自動販売機の開発	● エシカル消費に対応した商品開発 ● 環境配慮型自販機の開発 ● 環境配慮型素材を使用した原料袋への転換 ● フォレストコーヒーの保護、育成支援 ● 気候変動に対応したコーヒーノキの品種開発のための協働 ● 環境配慮型素材を使用した容器への転換 ● 自販機オペレートの見直し ● 環境配慮型素材を使用した空き容器回収袋への転換
	顧客や取引先の環境意識の高まりによる行動変容	気候変動やCO_2削減の動きによって環境に配慮した自販機導入や商品購入へ消費行動が変容する。	主要商品原材料の生産拠点の分散化環境配慮型自販機開発	
	プラスチック問題、海洋ごみ問題	石油由来原料の規制により包材価格が上昇 消費者意識の高まりにより、ペットボトル商品排除の動きが強まる。	リサイクルの推進 紙カップ、リユース容器使用の推進	
物理的リスク	平均気温の上昇による原材料調達影響	気温や湿度の上昇によりコーヒーにとって深刻なさび病が発生しやすくなり、収穫量の減少や、品質低下を招く。	産地の分散化、原料供給ルートの分散化、フォレストコーヒー※の保護、栽培技術の教育、生産地支援	
	降水パターンの変化による水資源の偏在	干ばつにより、コーヒー豆が不作になり、価格が高騰	産地の分散化、原料供給ルートの分散化、フォレストコーヒー※の保護、栽培技術の教育、生産地支援	
	異常気象と自然災害の頻発	巨大ハリケーン等によりコーヒーノキそのもの、または収穫時期のコーヒー豆被害が拡大 物流寸断等が長期化することで調達・生産・調達量が減少 自動販売機の稼働停止、または、交通網の寸断によりサービス停止	主要商品原材料の生産拠点の分散化、異常気象を想定したBCP策定、ハザードマップに基づく営業拠点開設	

用語について

※　フォレストコーヒー
森に自生しているコーヒーの樹から実を収穫するコーヒー豆のこと。

カーボンニュートラルな社会の実現のために

気候変動への対応、生物多様性の保全を目指して

( ) 内はターゲット番号

6 安全な水とトイレを世界中に (6.6)
7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに (7.2)
12 つくる責任 つかう責任 (12.2) (12.4) (12.8)
13 気候変動に具体的な対策を (13.3)
14 海の豊かさを守ろう (14.1)
15 陸の豊かさも守ろう (15.4)
17 パートナーシップで目標を達成しよう (17.17)

紙カップへの国産材活用で国内の森林吸収源を育成

ー“紙カップ式”のアペックスだからできることー

アペックスがカップ式自動販売機に注力しているのは、「おいしいコーヒーをお届けできる」「一杯ごとその場で調理するからいつでも作り立てである」ことはもちろん、「砂糖やミルクの量の調整ができる」「冷たいお飲み物には氷が入る」等々の理由がありますが、「紙カップ」という容器にもこだわりを持っています。紙カップの持続可能な責任ある調達のために、健全な森林の育成は非常に重要であるという考えのもと、間伐材をはじめとした国産材の利用や、普及啓発に取り組んでいます。この取り組みは、カーボンニュートラル社会の構築に貢献します。

紙カップ原紙に間伐※1材を活用

アペックスでは、2013年に、当時、自動販売機オペレーター業界初の取り組みとして、“間伐材を含む国産材100%”にこだわり、間伐材紙カップの使用を開始しました。

間伐材の活用は、森林の手入れが進むことで、日本の健全な森林育成と林業の成長産業化の実現の一助となります。日本の森林を健やかにすることにより、森林が本来持っている機能のひとつである水源涵養機能（すいげんかんようきのう）※2を高め、おいしいお飲み物を作る上で欠かせない“おいしい水”を育むことにつながります。そして、紙カップに国産材、特に間伐材を利用することで、日本の森林を健やかに育成し、パリ協定※3に基づく温室効果ガス削減目標の達成に必要な森林吸収量の確保に貢献できます。2021年10月に改訂された地球温暖化対策計画では、健全な森林の整備等で30年度に約3,800万t（13年度総排出量比2.7%相当）のCO_2を森林吸収量として確保する目標が掲げられています。

間伐材を活用した紙カップ

自動販売木®の展開で国産材使用の啓発

アペックスでは、間伐材紙カップを使用し、地産材を活用したシートでラッピングしたカップ式自動販売機を「自動販売木®」と名付け、全国に“植林”中です。地元のおいしい飲料水を活用し、地元を大切にするアペックスのカップ式自動販売機ならではの取り組みです。

※自動販売木®はアペックスの登録商標です。

自動販売木®（北海道庁様）

MEMO

▶ 地球温暖化緩和のための間伐の役割

気候変動の主因は、人為起因のCO_2の増加であるといわれており、それを減らすには、CO_2の排出量を減らすことと、森林等の働きなどによって大気中のCO_2を吸収していくことの双方を推進していくことが必要です。森林による吸収量を確保するためには、人工林を健やかに育成しなければなりませんが、育成に欠かせないのが「間伐」という作業。間伐によって、樹木の成長を促進し、より多くのCO_2を吸収させることができるのです。また、健全な森林が育成されることにより、森林の自然災害への抵抗力が向上したり、水源涵養機能の向上や生物多様性の保全等、森林の持つ多面的な機能が発揮されるようになるというメリットもあります。

※80年生の1本の元気なスギの木は、1年で14kgのCO_2を吸い込んでくれます。例えば、車1台分のCO_2を、80年生のスギの木160本で吸収できるということになります。

間伐が遅れた森林

間伐が行われた森林

（写真：林野庁提供）

温室効果ガス排出量削減への取り組み

ー未来を見据えて、いまできることを確実にー

アペックスは、カーボンニュートラル社会実現に向け、環境負荷を「木を見て森を見ず」にならぬよう、ライフサイクル全般で捉えることに努めると同時に、“森を見て木を見ず”にもならぬよう両側面からのアプローチをしています。

再生可能エネルギーの活用

中部リサイクルセンター（自社リサイクル施設:愛知県東海市）では2021年より、再生可能エネルギーに切り替えており、循環型社会の構築をCO_2排出量実質ゼロで目指します。

また、大府本社屋に太陽光パネルを設置し、消費電力量の一部を太陽光発電で賄っています。

中部リサイクルセンター

※中部リサイクルセンターの詳細はP25～28をご参照ください。

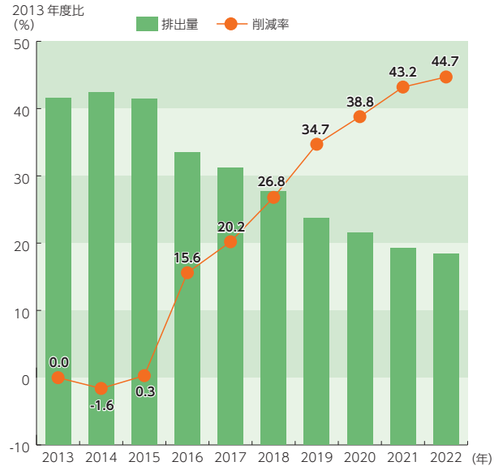
大府本社

自動販売機1台当たりCO_2排出量の削減※

アペックスでは、運用しているカップ式自動販売機の1台当たりCO_2排出量の削減に取り組んでいます。今後とも、自社のアペックスシリーズ機は、省エネ、省資源、特定化学物質の不使用、グリーン冷媒の使用、環境配慮設計、リサイクルのしやすさ等に配慮したグリーン購入法への適合を最優先とした開発に努めるとともに、既存機については、弊社の入替基準等に基づき、適正な入れ替えを図ることにより、既存機の環境負荷低減にも努めてまいります。

※自社商権におけるカップ式自動販売機

● カップ式自販機1台当たりCO2排出量と削減率



用語について

※1　間伐
成長に伴い混み合ってきた樹木の一部を抜き伐る間引き作業のこと。

※2　水源涵養機能
森林が持つ機能のひとつ。森林の土壌は、降水を貯留し、河川へ流れ込む水の量を平準化して洪水を緩和するとともに、川の流量を安定させています。また、雨水が森林土壌を通過することにより、水質が浄化されます。このような、森林が水資源を蓄え、育み、守る働きのことです。

※3　パリ協定
2015年12月、フランスのパリで開催された第21回国連気候変動枠組条約締約国会議（COP21）において採択された、2020年以降の温室効果ガス排出削減等のための新たな国際枠組みのこと。

カーボンニュートラルな社会の実現のために

気候変動への対応、脱プラスチックを目指して

( ) 内はターゲット番号

12 つくる責任 つかう責任 (12.2) (12.5) (12.8)
13 気候変動に具体的な対策を (14.1)
14 海の豊かさを守ろう
15 陸の豊かさも守ろう
17 パートナーシップで目標を達成しよう (17.7.17)

リサイクルよりも環境負荷の低いことも
ーリデュース、リユースでできることー

カップ式自動販売機で提供する飲料は、CO_2排出量をライフサイクルで見ると環境優位性の高い飲料供給手段として一定の評価をいただいていますが、さらに一歩推し進め、カップ式自動販売機が脱プラスチックの課題解決の糸口になるのではないかという考えのもと、数年前からカップ、タンブラーやボトル等、繰り返し使用するリユース容器対応のコーヒー・リーフティーマシンの開発に取り組んでまいりました。

リユース容器（マイカップ、マイタンブラー、マイボトル等）対応マシンの展開

2020年秋からのテスト展開を経て、2021年より本格展開を開始しています。「使い捨てではない容器を繰り返し使えること」がお客様から高い評価をいただいております。

容器を繰り返し使用することで、廃棄物の発生を抑制することができますので、カップ、タンブラーやボトルのようなリユース容器は、使い捨てのワンウェイ容器と比べ、廃棄物削減の観点で環境負荷が低いことが認められています。また、CO_2排出量の点においても、繰り返し使用することでワンウェイ容器より環境負荷が低いことが確認されています。

参考

500mlの飲料提供に係るCO_2排出量についてワンウェイボトルであるペットボトルと比較した場合、マイボトル（ステンレス真空構造）を12回程度使用することで、マイボトルの方が小さくなります。

※ステンレス製ボトル（真空構造）を100回使用した場合の1回使用当たりの CO_2 排出量は13.90g。比較対象であるペットボトルの CO_2 排出量は、PETボトルリサイクル推進協議会が実施した「PETボトルのLCI分析調査報告書」の「耐熱用500ml 業界平均値（回収率 62.3%）」の評価結果によると、119gでした。

リユース容器対応マシン（CS-3）
- 専門店と遜色ないコーヒーとリーフティーがお楽しみいただけます。
- コーヒーとリーフティーは、それぞれ多様な抽出方法が可能です。
- 2つのブルワーを使用することで大容量商品も短時間で抽出することができます。

＊ボトルやタンブラー等のリユース容器を繰り返しご利用いただけます。

TOPIC・1　#CO2削減　#廃棄物削減　#脱プラスチック　#海洋プラスチックごみ問題

自動洗浄機を活用したマイボトルの利用促進に関する共同実証実験を実施
～循環型社会の推進に向けて5社が協働～

アペックスは、東京建物株式会社様、サーモス株式会社様、パナソニック株式会社様、味の素AGF株式会社様とともに、専用のコーヒーマシン（CS-3）と高速自動洗浄機の活用を通じたマイボトルの利用促進により廃棄物削減を目指す実証実験を、東京建物様の本社ビル7階に勤務する社員約300名を対象に約1か月間行いました。

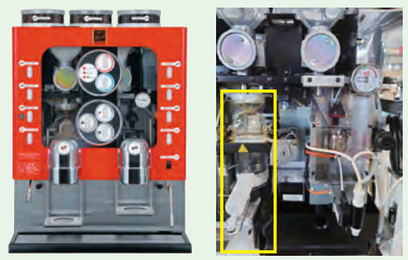
「マイボトル」に対し、実証実験前は単なる「環境配慮」と答えた方が多かったのに対し、実証実験後は、マイボトルの機能性や利便性を評価する声が多く聞かれました。廃棄物量に関しては、対象フロアでの紙カップ使用が期間中全面廃止されていたため、“廃棄物ゼロ”を実現。1人当たりのペットボトル廃棄量は、平均約16%削減することができました。実証実験前に懸念されていたマイボトルの「手洗い」については、実体験を経て、「面倒を感じない」派が大きく増加しました。一方、ドリンクの飲み替えや手洗いを面倒だと思う派に高評価だったのが高速洗浄機で、その存在がマイボトルの継続利用を促すと回答しています。実証実験を通じて、環境問題への意識が向上したと回答した方は約8割にのぼりました。また、コンビニ、カフェ、企業の総務部門、官庁、学校等からの問い合わせ、現地見学があり、“リユース容器を使った実証実験”への社会の関心の高さがうかがえます。

TOPIC・2　#脱プラスチック　#海洋プラスチックごみ問題

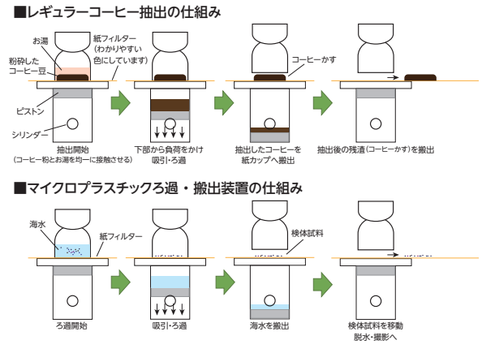
海洋プラスチックごみ問題の研究開発に技術提供

アペックスは、国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）が取り組む海洋プラスチック汚染に関わる研究開発に、アペックスが持つコーヒー抽出器のノウハウを提供しています（図：コーヒー抽出とマイクロプラスチック濾過の仕組み）。JAMSTECは、文科省の委託を受けて、ハイパースペクトルカメラによるマイクロプラスチックの自動分析手法の構築を進めており、海洋マイクロプラスチックのデータを効率よく取得するための技術開発を進めています。

海底広域研究船「かいめい」による海洋プラスチック汚染調査が2022年末から2023年初にかけて行われました。今回の調査航海では、アペックスの技術が活かされたマイクロプラスチック自動分析装置の試験運転が実施されました。アペックスはこれからも、JAMSTECの研究開発に全面的に協力していきます。マイクロプラスチック分析技術を迅速化することで、分布の実態解明を加速化し、海洋プラスチック汚染対策に貢献してまいります。



もととなったアペックスのコーヒーマシン（黄色枠が抽出器）



コーヒー抽出とマイクロプラスチックろ過の仕組み

研究船「かいめい」に搭載したマイクロプラスチック自動分析装置。海水水道から取り込んだ海水をろ過し、連続的に分析します。アペックスのコーヒーマシンの連続ろ過搬送技術を使用し、海水試料のろ過～データ取得～試料回収までのフローシステムが製作されました。
（写真提供：JAMSTEC）

マイクロプラスチックを含む海水試料のろ過・ろ紙の搬送にアペックスのコーヒーマシン技術が活用されています。
（写真提供：JAMSTEC）

海底広域研究船「かいめい」（写真提供：JAMSTEC）

その他のカーボンニュートラルに向けた取り組み

アペックスでは、日常のオペレートサービスに使用しているごみ袋に、2022年度より使用済みのストレッチフィルムをリサイクルしたものを使用しています。また、原料の包材には、植物由来のバイオマスプラスチックやバイオマスインキを使用し、原料用カートンにはFSC®ミックス紙を使用しています。そして、新たに、カートン留めに使用しているテープも、これまで透明テープだったものをクラフトテープに変更するなど、カーボンニュートラル社会実現のために、できることから少しずつ取り組んでいます。

循環型社会の構築のために

廃棄物の削減・資源の再利用を目指して

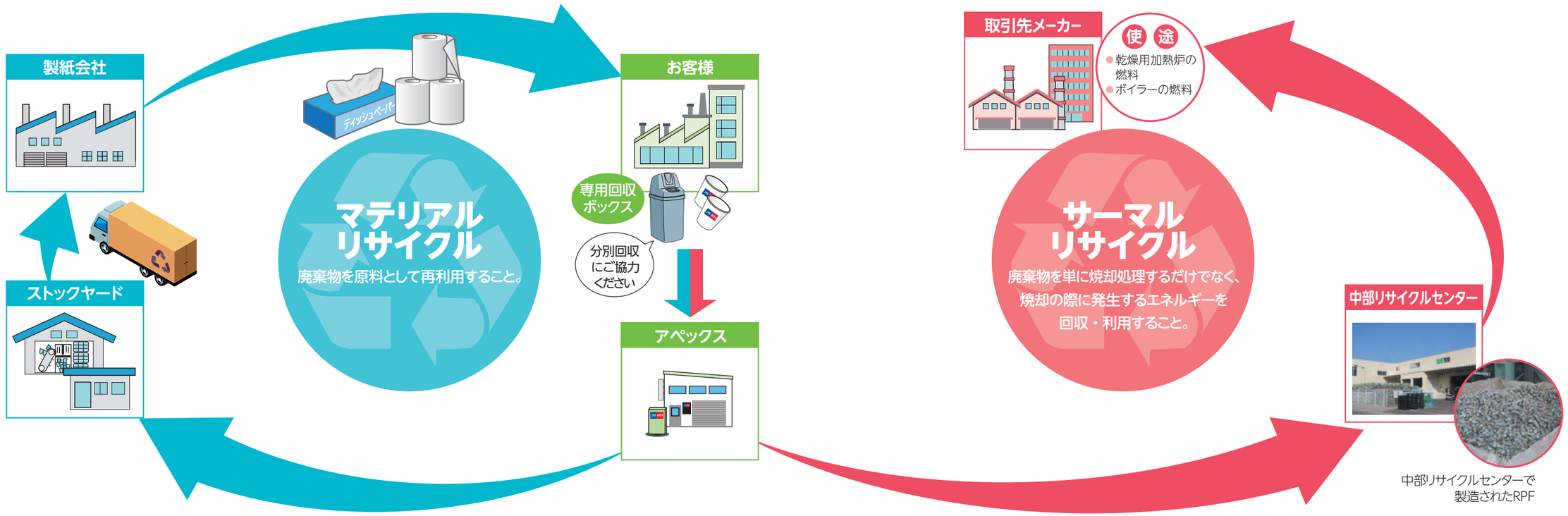
（ ）内はターゲット番号

12 つくる責任 つかう責任 (12.2) (12.5) (12.8)
14 海の豊かさを守ろう (14.1)
15 陸の豊かさも守ろう
17 パートナーシップで目標を達成しよう (17.17)

資源の循環利用を推進ー廃棄物の削減・資源の再利用ー

アペックスでは、廃棄物の削減・資源の循環を図るための活動を推進しています。拡大生産者責任[※1]のもと、容器包装類、プラスチック類、そしてコーヒー残渣等の廃棄物を回収からリサイクルまで責任を持って一括管理することにより、廃棄物の削減・資源の有効活用に努め、循環型社会構築に貢献しています。

● アペックスの使用済み紙カップ等のリサイクルシステム



中部リサイクルセンターで製造されたRPF

紙から紙へリサイクル

アペックスでは、1997年、当時はリサイクルできないもののひとつといわれていた紙カップのマテリアルリサイクルシステムを確立。翌年の1998年より、回収した紙カップを衛生紙（トイレットペーパーやボックスティッシュ等）へリサイクルしています。コロナ禍においては、感染リスク防止のため、一部の地域を除きマテリアルリサイクルを中断しておりましたが、2023年度からは、資源の回収効率のよい地域での新たなリサイクルシステムの構築に取り組みます。

2022年度の実績

2022年度は、約35tの使用済み紙カップ等のマテリアルリサイクルを行いました。

＊2020年以降、新型コロナウイルス感染リスク低減のために多くの地域でマテリアルリサイクルを見合わせていましたが、2023年４月より、回収効率のよい地域から段階的に再開しています。

用語について

※1　拡大生産者責任

生産者が製品の生産・使用段階だけでなく、廃棄・リサイクル段階まで責任を負うという考え方で、循環型社会形成推進基本法にも導入されています。

※2　RPF（アールピーエフ）
（Refuse derived paper and plastics densified Fuelの略）とは

廃棄物固形燃料のひとつ。RPF生産や活用は、石炭の代替として乾燥用加熱炉の燃料やボイラーの燃料として使用されることから、気候変動緩和や海洋プラスチックの削減に役立つ技術として、一般産業界からも認知されるようになっています。アペックスでは、使用済み紙カップや紙パックなど、主に紙とプラスチックを破砕・圧縮して作っています。

容器包装類の循環利用

アペックスでは、回収した紙カップのマテリアルリサイクルを1998年から行っており、リサイクルするだけではなく、リサイクル製品の販売を行い、資源の循環を図っています。また、2001年からは「可燃廃棄物」をリサイクルの対象物としたサーマルリサイクルにも取り組んでいます。

その他の空き容器についても、資源化物として循環利用を図っておりますが、特にペットボトルに関しては、近年深刻化している海洋プラスチックごみ問題や「ボトル to ボトル」リサイクルにも真摯に取り組むべく、空き容器の徹底分別回収に努めています。

紙・廃プラからエネルギーへリサイクル

2001年3月、自動販売機を通して排出されるすべての可燃廃棄物のリサイクルを目指して、オリジナルの「車両搭載型固形燃料化設備」で中部地区の事業所から発生する可燃廃棄物の固形燃料（RPF）化を実施。その後、2004年10月からは新設した[中部リサイクルセンター]において、自社・他社問わず発生する廃プラ類も受け入れ、固形燃料化し、廃棄物の削減に努めています。製造したRPFは、検査機関で高位発熱量や塩素含有率等の項目に関する試験を行っています。アペックスのRPFは、家庭系一般廃棄物から製造される生ごみ・水分を主体としたRDFとは異なり、原料が安定しており、塩素や水分がほとんど含まれていないので、安心してご使用いただける固形燃料です。

2022年度の実績

2022年度は、約1,130tの使用済み紙カップ等のサーマルリサイクル（余熱利用等含む）を行いました。

［RPFの長所］

● 化石燃料の代替となりますので、資源枯渇防止に役立ちます。　● 化石燃料と同等の熱量があります。　● 灰分化率は一般的に3～7%（注）。石炭は11～15%程度なので、使用後の灰の埋立て処分量が削減できます。　● コンパクトな形状でハンドリング性に優れています。　● 歩留まりがよい上、素材段階からリサイクル段階に要するエネルギーの小さい燃料です。　● 紙カップと廃プラの分別の必要がないため、作業効率にも優れます。　● 石炭（例：輸入一般炭）に対して、燃焼時に同一熱量回収を行う過程で石炭よりも約33%のCO_2排出量削減（注）になり、地球温暖化防止に貢献します。（注）日本RPF工業会調べ。

	アペックスのRPF	RDF
発熱量（cal/g）	5,500程度	4,000程度
塩素分（%）	0.2未満	2.0未満

※中部リサイクルセンターのRPF化ラインで製造されたRPFの成分と一般的なRDFを比較

循環型社会の構築のために
廃棄物の削減・資源の再利用を目指して

（ ）内はターゲット番号

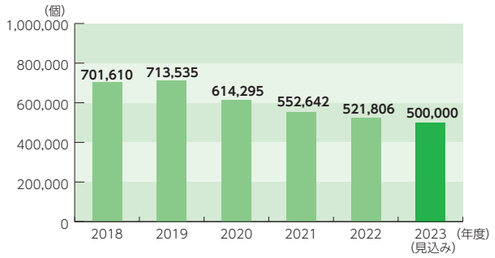
12 つくる責任 つかう責任 (12.2) (12.5) (12.8)
14 海の豊かさを守ろう (14.1)
15 陸の豊かさも守ろう
17 パートナーシップで目標を達成しよう (17.17)

資源の循環のために

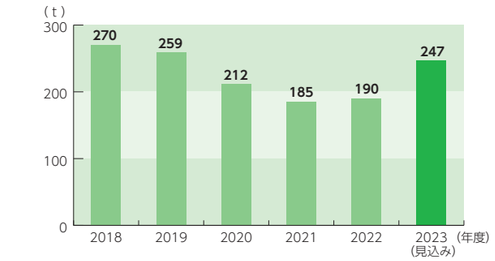
アペックスでは、循環型社会構築のために、回収した可燃廃棄物をリサイクルするだけではなく、リサイクル製品の販売を行い、資源の循環を図っています。

アペックスでは、2025年末までにカップ式自動販売機シェア8割獲得を目指しており、缶・ペットボトル自動販売機の所有台数が縮小傾向にあることから資源化物販売量は減少傾向にありますが、紙カップを主体に製造するRPF販売量は増加傾向にあります。

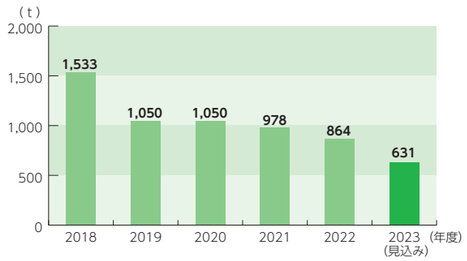
● 衛生紙販売量



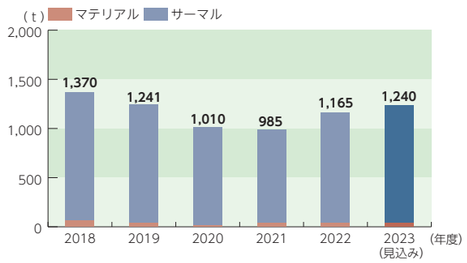
● RPF 販売量



● 資源化物販売量



● 使用済み紙カップリサイクル量



リサイクル工場見学会の実施

アペックスでは、弊社のリサイクルシステムをご確認いただくため、お客様のご要望に合わせて、ストックヤードおよび製紙工場、中部リサイクルセンター、日本ベンダー整備株式会社のご案内をしております。

コーヒー残渣リサイクル

専用回収箱に回収されたコーヒー残渣

カップ式自動販売機のレギュラーコーヒーは、お客様からオーダーをいただくと（商品ボタン選択後）、その都度、コーヒー豆を挽き、ペーパーフィルターで濾しています。その後、コーヒー残渣は、自動販売機内で脱水し、減量化した状態で、機械内部に据え付けてある専用回収箱にまとめられます。

アペックスでは、このようなレギュラーコーヒー抽出後の残渣を、2008年度から、中部地区で肥料へとリサイクルする取り組みを始めました。関西地区においても、2010年度から炭へとリサイクルする取り組みを実施しています。

今後とも、残渣回収地域の拡大、収集の効率化を図りながら、食品残渣の再生利用化を推進し、食品廃棄物の削減に引き続き貢献してまいります。リサイクル方法については、肥料化や炭化のほか、バイオマスプラスチックの原料をはじめとする用途等を含め、適宜検討を行ってまいります。

また、食品廃棄については、廃棄物処理法に則り、適正に処理されていることを、毎年現地に赴き、確認しています。

用語について

※ JVRリサイクルセンター
2001年6月に開設。廃棄する自動販売機から、社内基準に基づいた再生可能部品を回収しています。

中部リサイクルセンターの取り組み

2004年に自社のリサイクルセンターとして愛知県東海市に開設しました。紙カップや原料袋等の可燃廃棄物の固形燃料（RPF）化と缶やペットボトル等の空き容器の資源化を行っています。中部地区における飲料自動販売機から排出される使用済みのすべての容器包装類（紙カップ、原料袋、缶、ビン、ペットボトル等）のリサイクルを自社で責任を持って行うことで、廃棄物の削減と循環型社会構築、脱炭素社会構築に貢献します。

● 固形燃料（RPF）化ライン（1本）

自社の自動販売機から排出される紙カップ、原料袋等の容器包装類、廃プラスチック類（社外から受け入れたものを含む）を、破砕 ・ 圧縮し、直径15mm ・ 長さ50mm程度のクレヨン状に加工します。製造した固形燃料は、検査機関に持ち込み、高位発熱量、灰分、水分、硫黄、塩素の5項目について成分分析を行っています。

固形燃料化ライン
- **取り扱い品目**：紙カップ・原料袋・紙パック・紙（複合紙）・廃プラスチック類等（※塩化ビニール不可）
- **処理能力**：3.6t ／日

● 資源化ライン（1本）

主に自動販売機を通して排出された、空きスチール缶 ・ アルミ缶 ・ ペットボトル ・ ビンを選別（ペットボトルとビンは手選別）し、スチール缶は35kg、アルミ缶は7kgのブロックにプレスします。選別 ・ 圧縮された空容器は、各メーカーに出荷後、再商品化されます。

資源化ライン
- **取り扱い品目**：スチール缶・アルミ缶・ペットボトル・ビン
- **処理能力**：12.0t／日　ペットボトルのベーラー機
- **処理能力**：4.0t／日

MEMO

▶ **よりよい労働環境づくりを目指して**

中部リサイクルセンターでは、よりよい労働環境づくりを目指し、騒音障害防止やそれに伴う二次災害防止に向けた取り組みや防災訓練を実施しています。

耳栓を着用しての作業を義務化

二次災害防止のために

日本ベンダー整備株式会社の取り組み

日本ベンダー整備株式会社は、1976年、アペックスの整備部門が独立して誕生しました。

アペックスの規程に基づき、お客様先に設置した自動販売機の整備を行っています。計画的な整備を行うことによる自動販売機の長寿命化はもとより、省資源化、廃棄物の削減を図ります。2015年4月には電気用品製造事業所登録、2016年1月には電気用品安全法（PSE法）適合を取得しています。

● 整備と環境負荷低減

日本ベンダー整備株式会社では、稼働時の故障や整備時の改良点等について、アペックスと情報の共有化を図りながら整備を実施します。それらの貴重な情報は、次の新機種開発にも活用され、自動販売機の進化に役立てられています。

また、単なる整備ではなく、1点1点の部材の材質の見直しまでを行うことで、どの程度の環境負荷低減を図ることができるのかを検証しながら、積極的な改善や修理等を行っています。

日本ベンダー整備株式会社では、JVRリサイクルセンター※で回収した部品を再生し、自動販売機の整備や修理に使用しています。

● 2022年度実績

2022年度は、1,102台の自動販売機の整備を行いました。

● 円滑で継続的な環境保全活動のために

日本ベンダー整備株式会社の敷地内にある開発室の原料加工センターとともに、2000年12月、ISO14001を認証取得しています。自動販売機の整備工場と原料の加工センターという、オペレート事業とは異なる業務内容であることから、順守義務事項もアペックスとは異なり、それぞれの厳しい基準を順守するために独自の活動を行っています。

環境保全活動の運用管理については、文書類、活動の進捗、順守状況、不適合是正処置報告等の記録類、有資格者の教育に至るまで、誰もがいつでも確認できる一元的なシステムで行っています。一元管理することで、活動の質の均一化を図ることはもちろん、行政への届出や許可証の有効期限に関しても、うっかりミスの防止につなげています。

事業活動における環境負荷

環境負荷をライフサイクルで把握することを目指して

環境負荷の低減

アペックスでは、バリューチェーンから発生する環境負荷の継続的な低減を図り、地球全体の収支バランスの調和がとれるよう資源を循環させるために、環境負荷を可能な限りライフサイクルで捉えることに努めています。

用語について

※　エシカル調達
エシカル(ethical)は「倫理的な、道徳上の」という意味。グリーン調達に加えて、環境問題や人権問題などさまざまな側面を調査した上で調達することをいいます。

マテリアルバランス

●エネルギー起源によるCO_2排出量

気候変動の緩和に向けて

より消費電力量の小さい自動販売機の開発や、お客様への適正台数・適正配置の設置提案、旧型の自動販売機から新型のものへの入れ替え等により、自動販売機から排出されるCO_2削減に取り組んでいます。また、自動販売機オペレートに際しても、ご利用者様へのご迷惑をおかけしないように売り切れや故障等を未然に防ぐ取り組み、巡回計画の見直し等、業務全般にわたる改善にも積極的に取り組んでいます。

●紙カップやコーヒー豆の調達

環境負荷をライフサイクルで捉えるために

紙カップ原紙には合法木材を使用することはもちろん、国内の健全な森林育成のために、間伐材を含む国産材使用にこだわります。また、コーヒー豆の調達には、生物多様性の保全も視野に入れるなど、エシカル調達※に配慮しています。

●レギュラーコーヒー残渣

食品残渣の循環に向けて

専用回収箱に回収されたコーヒー残渣

レギュラーコーヒー抽出に伴い発生する残渣については、2008年度に中部エリアで肥料化リサイクルを開始。その後、順次リサイクル地域を拡大し、肥料化のほかに、炭化も行っています。また、気候変動の観点から、バイオマスプラスチック原料への活用についても検討を重ねています。

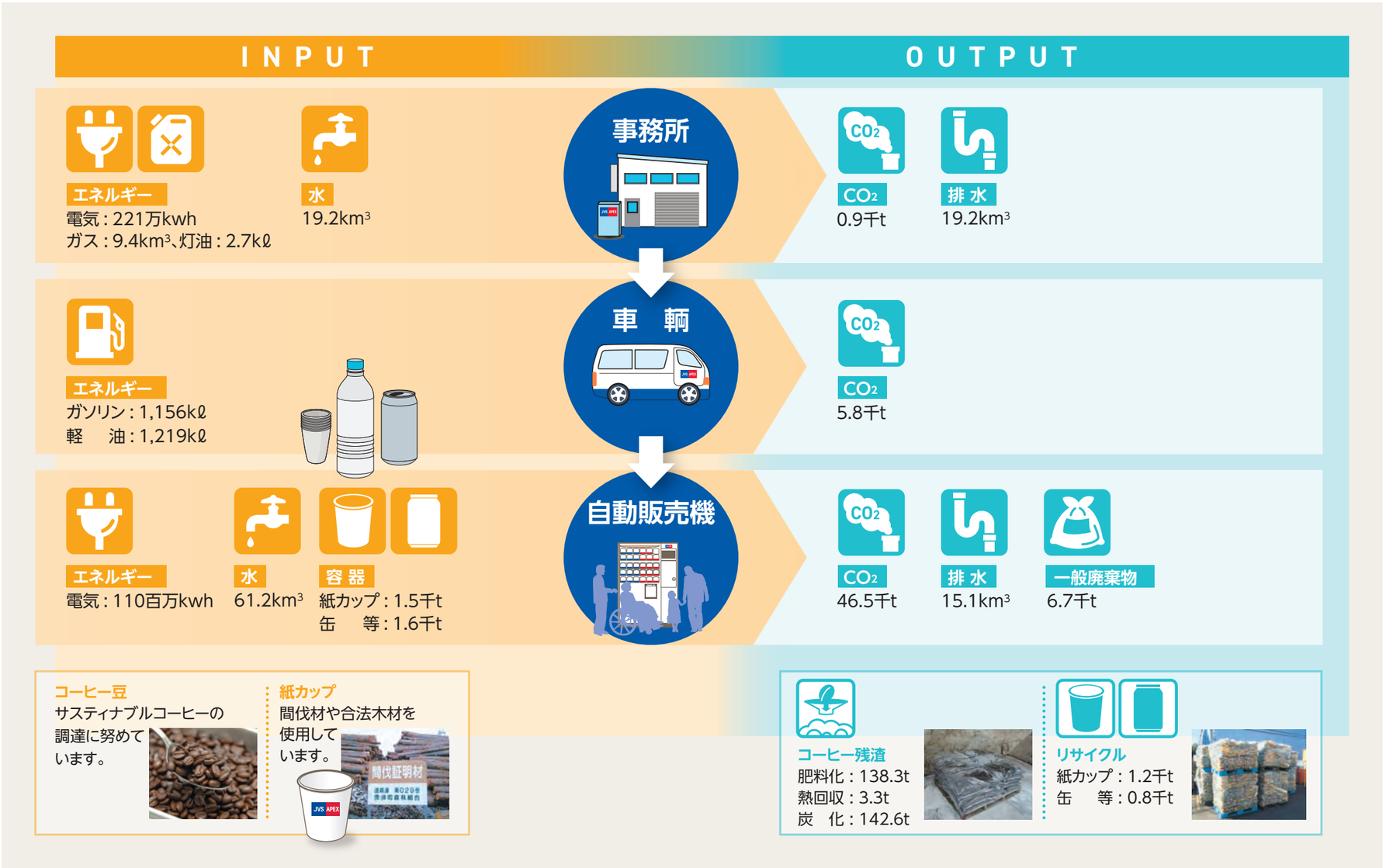
●廃棄物の削減

循環型社会構築のために

使用済みの空き容器(紙カップ、ペットボトル、缶、ビン)については、回収からリサイクルまで責任を持って行い、廃棄物削減と循環型社会構築に貢献しています。ただ、近年、特に不特定多数の方にご利用いただく飲料自動販売機に併設されているリサイクルボックスへの異物混入が原因で、リサイクルできない場合も多く発生しており、分別徹底と異物混入防止の呼びかけを業界一丸となり取り組んでいます。

異物混入を防ぐために工夫されているリサイクルボックス

●自動販売機オペレーター事業フローとマテリアルバランス(主要物資)



継続的な改善を目指して

環境マネジメントシステム ーマネジメント体制の強化・拡充ー

アペックスの環境保全委員会は常に取締役が出席のもと開催され、環境保全責任者より重要な環境課題の管理についての情報提供を受けています。その上で、事業活動と環境活動を一本化し、継続的に進化させていく手法のひとつとして、全事業所およびグループで、環境マネジメントシステムの国際規格ISO14001を認証取得しています。

●社内環境監査システム

アペックスでは、社内規程に基づき、毎年全部署で社内環境監査を実施し、環境保全活動の妥当性を確認しています。従来、監査員が現場に赴いて監査を行っていましたが、コロナ禍以降、オンラインを活用したリモート監査も取り入れています。指摘事項については、速やかに是正処置に取り組み、各審査員が是正内容の確認を行います。

神戸支店

●社内評価制度

アペックスでは、環境保全活動を徹底させ、環境側面に関係している適用可能な法規制・協定および自主管理基準について、高いモラルで順守するため、人事考課にも考慮される社内環境活動評価制度を設け、ランクに応じた教育や指導を行っています。今後とも、環境経営を事業活動の基軸にすべく活動を行ってまいります。

環境コンプライアンス

アペックスでは、ISO14001の手順に沿って環境影響評価を各現場で毎年行い、重点項目を特定し、環境リスクの未然防止と、発生時の環境影響の拡大防止に努めています。

●順守状況チェックリストによる管理

年4回、環境関連順守事項の順守状況を、チェックシートを使用して管理しています。

●電子マニフェスト※1による廃棄物管理

アペックスでは、産業廃棄物の適正管理にあたり、全拠点において電子マニフェストを導入しています。

●廃棄物処理委託契約の電子化

コンプライアンス強化と業務効率化を図るため、廃棄物処理委託契約の電子化を全社で進めています。

●産業廃棄物処理状況の確認

アペックスでは、産業廃棄物の処理委託契約前の現地確認を義務付けているほか、契約後も、自社の廃棄物に関し、年1回以上の処理状況の確認を行っています。

＊処理状況の具体的な確認方法を定めている自治体下においては、その方法を順守します。

産廃現地確認（長野営業所）

産廃現地確認（松江営業所）

●2022年度の順守状況

2022年度、環境に関わる法規制などの順守について、規制当局からの不利益処分（許可の取り消し、操業停止命令、設備の使用停止命令、罰金など）はありませんでした。

環境コミュニケーション

2022年度、環境関連の要望・問い合わせは、環境保全活動に関する調査・協力依頼および問い合わせ等が35件、苦情が2件ありました。いただいた苦情については適切に対応し、再発防止に向け、全社員への教育を実施いたしました。また、その他すべての依頼および問い合わせ事項については、速やかに対応いたしました。

用語について

※1　電子マニフェスト
従来の紙マニフェスト運用と比較すると、電子化することにより、事務処理の効率化を図ることができるとともに、データの透明性が確保され、法令の順守を徹底することができるというメリットがあります。

※2　環境会計
企業が持続可能な発展と、環境保全への取り組みを推進していくことを目的として、事業活動における環境保全のために投じたコストと効果を数値化して評価する会計手法のこと。

社員への教育

アペックスでは、環境教育の重要性・必要性を重んじ、環境マネジメントシステムの適正な運用と、環境目標の達成、環境法令の順守のための教育を全事業所において実施しています。また、より理解を深めるために「理解度テスト」を行い、必要に応じて力量を評価しています。2022年度もコロナ禍であったことから、オンライン教育が中心となりました。オンラインで気軽に開催できる長所を活かし、少人数での実施もでき、積極的な教育機会が生まれました。

新入社員研修

管理者を対象とした環境教育

対　象	教育名
全社員	環境一般教育
新入社員	新入社員教育（環境教育あり）
車両運転者	エコドライブテクニック教育
力量業務従事者	環境特別教育
支社長・部署の長	管理者教育（環境教育あり）
新任部署の長	新任部署の長教育
新任マネージャー	新任マネージャー教育
内部環境監査員	内部環境監査員教育
営業担当者	環境教育（サスティナビリティレポートを中心に）

環境計画の概要と評価

アペックスでは、持続可能な社会の実現を目指し、環境方針に基づき、継続的な環境保全活動を行っています。2022年度も、以下のような具体的な環境目標を設定し、達成するために取り組んできました。未達で終わった目標については、対策を講じ、2023年度も改善に向けた取り組みを継続します。環境影響評価の結果、環境負荷が大きい「車輌給油量削減」や「紙カップリサイクル率向上」「省エネ自販機稼働率向上」等についても、今後とも各事業プロセスにおいて取り組んでまいります。

環境目的	2022年度環境目標	実績		評価※
気候変動対策・資源枯渇防止・業務改善	【労働分配率改善・化石燃料の有効活用】（事業統括本部）売り上げに対する給油量（原単位）:2021年度比0.5%改善	改善率	6.2%	○
廃棄物削減・循環型社会構築	【紙カップリサイクル率向上】（事業統括本部）年間紙カップリサイクル率：68.0%	達成率	126.6%	○
社会貢献	【一部署一役運動】（全部署で地域社会への貢献活動を実施）頻度：2.0回／月（80%の部署で達成）	達成率	100.0%	○
業務改善	【故障停滞（人的要因）率の削減】（品質管理部）削減停滞率（年度末）:1.00%以下	停滞率	1.19%	×
	【廃棄物処理代の削減】（環境部）処理費用：2021年度実績以内	達成率	102.5%	○
	【ホームページ認知度向上】（経営企画室）ホームページPV数:2021年同月比2%アップ	達成率	101.5%	○
気候変動対策・資源枯渇防止	【環境対応型自動販売機の開発】（開発室）進捗管理：100%	達成率	100.0%	○
	【工場のCO_2排出量削減】（中部リサイクルセンター）CO_2排出量:2021年度比2.0%削減	達成率	141.1%	○
	【カップ機の消費電力量削減】（調達物流部）1台当たり消費電力量：2013年比30.0%削減	達成率	112.3%	○
労働安全	【車両事故件数の低減】（総務部）年間車両事故件数：前年度比50%削減	達成率	45.5%	×
グリーン調達	【グリーン購入法特定調達物品の調達の推進】（総務部）グリーン品目の割合：総購入点数に対し84%以上	達成率	106.8%	○

※評価について　達成率が100%以上のものは達成（○）、100%に満たないものは未達成（×）

環境会計※2

（百万円）

会計区分		費用	効果
サービス活動	リサイクル	53.4	205.5 ＊1
	廃棄物処理	163.0	―
	その他環境整備	112.6	―
管理活動	ISO14001 認証維持・教育	1.4	193.4 ＊2
社会活動	サスティナビリティレポート作成等	2.8	―
合　計		333.2	398.9

＊1　再生品販売費（衛生紙、RPF、資源化物、その他）
＊2　2000年（全社 ISO14001認証取得活動開始）と比較した光熱費・帳票代等の削減費用

地域コミュニケーション活動

地域社会の一員として地域に根差すことを目指して

（ ）内はターゲット番号

11 住み続けられるまちづくりを　17 パートナーシップで目標を達成しよう

（17.17）

地域社会のために

アペックスでは、「私たちは、地域社会に貢献し信頼を集めます。」を行動宣言のひとつに掲げ、地域社会との交流・社会貢献活動に力を注いでいます。

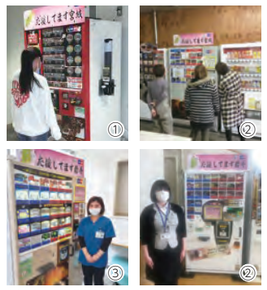
地域貢献活動

2022年度は、コロナ前同様とまではいかないものの、少しずつながら動き出すことができました。一方、被災地への復興支援、雪国における除雪作業、事務所周辺の定期清掃、地域の子どもたちの安全を守る「こども110番の家」、防災イベントへの参加や展示、朝の通学ゾーンにおける交通安全立哨運動や啓発活動、トイレットペーパー寄贈等は、例年通り実施することができました。また、コロナ禍とはいえ、SDGsについての中学生の企業訪問を受けたり、オンラインによる高校生との環境質問を受けたり、新型コロナウイルス感染症によってもたらされた新しい生活様式の中で生まれた新しい活動もありました。

少しずつ活動を広げることができつつあるいま、新しい活動スタイルを取り入れながら、自分たちにできることは何なのかを見つめ、微力ながらもできる限り積極的な地域社会との交流、社会貢献を図ってまいります。

●被災地の復興支援

東北支社では支社内で立ち上げているプロジェクト『2023年想いと・絆in東北』の活動として、いまなお復興に尽力されている方々を応援しようと、2023年3月10日・11日2日間、宮城・岩手の両県内5カ所（合計6台）の自動販売機において、それぞれ「応援してます宮城」「応援してます岩手」というポスターを貼り、全商品無料キャンペーンを展開しました。コロナ対策が緩和され、昨年より多くの方にご利用いただくことができました。また、ご利用者からは、感謝のお言葉とともに当時の話をうかがうことができ、まだまだ過去の災害ではないことを実感しました。



①山元町 防災・交流センター様
②石巻合板工業株式会社様
③岩手県立大船渡病院様
④岩手県立宮古病院様

●「ヒナを拾わないで!! キャンペーン」への協賛

アペックスは、2020年度から毎年、生物多様性の保全、陸の豊かさを守るため、公益財団法人日本野鳥の会の「野鳥の子育て応援（ヒナを拾わないで）キャンペーン」の趣旨に賛同し、協賛しています。

キャンペーンポスター

●足尾緑化体験や、コミュニティラジオの環境番組に参加

宇都宮営業所は、2022年10月に開催された「足尾緑化体験（栃木リビング新聞社主催）」に参加しました。これは“足尾の山に緑を取り戻そう”という活動で、当日はNPO法人「足尾に緑を育てる会」スタッフの協力のもと、足尾の歴史や植樹活動の話、植樹方法の説明を聞いた後、一人ひとり苗木を植えました。宇都宮営業所では、デモカーを用意し、植樹体験後に参加者においしいコーヒーやココアでほっとひと息ついていただきました。

また、宇都宮コミュニティFM<ミヤラジ>の環境番組「エコみや」に出演し、アペックスの環境への取り組みについて紹介させていただきました。

＊宇都宮営業所は「宇都宮市SDGs人づくりプラットフォーム」に参加しています。

●日本ベンダー整備でガレージセールを開催

日本ベンダー整備株式会社では、毎週水曜日、アペックスで取り扱っているコーヒー豆やアペックス原料加工センターで製造しているココア等を直売していますが、近隣住民の皆様にこの情報がまだまだ認知されていないことを解消するためにガレージセールを開催しました。日本ベンダー整備の社員はもとより、原料加工センターや大府本社の社員が商品提供で協力し、日曜日に開催したこともあり、近隣住民の皆様にたくさんお買い上げいただくとともに、認知度向上につながりました。売上金は大府市を通じてウクライナの人道支援にお役立ていただくため寄付しました。これを受け、「（戦争被害の支援は、人権や貧困、世界平和等々のSDGs目標達成のためにも非常に重要な課題ですので）大府市としても積極的に支援を推進してまいります（猪飼部長）」というコメントを頂戴しました。

猪飼部長（大府市役所福祉部）（右）と大久保工場長

●中学生とSDGsを学ぶ（企業訪問）

2022年5月9日、和洋九段女子中学校２年生６名様が「企業訪問」でご来社くださいました。中学1年生の時からSDGsについて勉強し、理解を深めてこられた生徒の方々が、実際にSDGsや社会貢献に取り組んでいる企業や団体を訪問し、ご自分たちが調べたことをプレゼンテーションしたのち、インタビューを行うというもので、「先を見て齊（ととの）える」を校訓に掲げていらっしゃる和洋九段女子中学校ならではの取り組みでした。

企業・団体への訪問後、校内で報告会、10月の文化祭において展示による発表、文化祭来校者の前でのプレゼンテーション形式による発表が行われました。

●除雪作業

雪国では、「除雪」が欠かせません。積もった雪をそのままにしておくと、道路は車などが通れなくなったり、人の通行の妨げにもなったりします。弘前サービスセンターでは、2023年の雪シーズンの朝も、事務所周辺の公道を含む除雪作業から取りかかりました。

●こども110番まもるくんの会社

愛媛営業所では、地域の子どもたちの安全を守る活動をしています。

●八王子ものづくりEXPOへの出展

2022年11月11日-12日の両日、八王子にある”東京たま未来メッセ“にて、CS-3とAPEX 30SVを展示し、アペックスブースにて、八王子市内の企業様と交流し、多くの方に試飲していただきました。

八王子商工会議所の村井様（中央）と、当社 村野課長（右）、関氏

●「CS推進奨励賞」を受賞

柏営業所がネクセリア東日本株式会社様より「CS推進奨励賞」をいただきました。CS推進奨励賞はネクセリア東日本株式会社様の外部表彰のうち、高速道路を利用されるお客様へのホスピタリティ溢れる接客など、CS向上に寄与する取り組みに対して行う表彰制度で、新型コロナ感染症感染拡大の影響により中断されておりましたが、2022年に3年ぶりに再開されました。今回、守谷SAの当社のパッケージ自動販売機8台について、ご利用者にわくわく感をご提供したいとマネージャーが立案し、担当者が手作りPOPで応えて“おもてなし”をしていたことを評価していただき、褒賞をいただきました。自動販売機従事者としては初めての表彰とのことです。

（右から）ネクセリア東日本株式会社
関東東支店　安田支店長様、
当社 安倍マネージャー、松岡氏

お問い合せ

アペックスグループは、環境マネジメントシステムの国際規格ＩＳＯ１４００１を認証取得し、環境経営を積極的に推進することで、持続可能な社会の実現に向けた取り組みを行っています。

https://www.apex-co.co.jp